

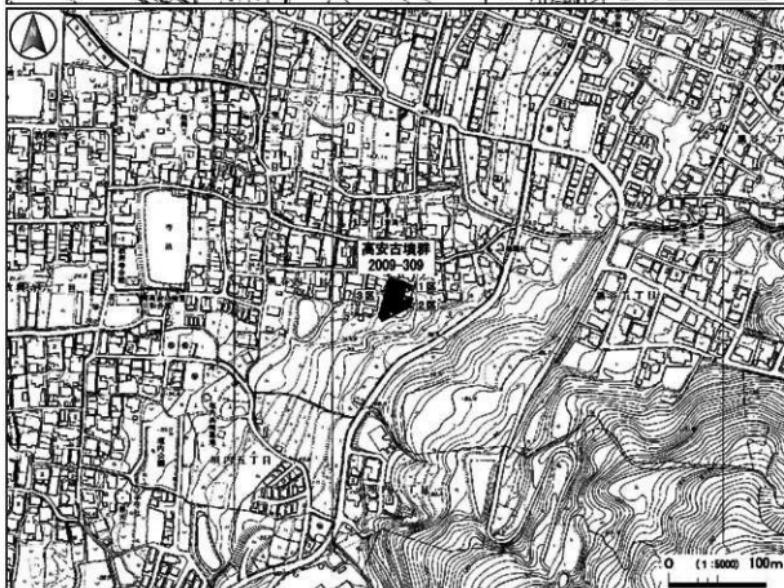
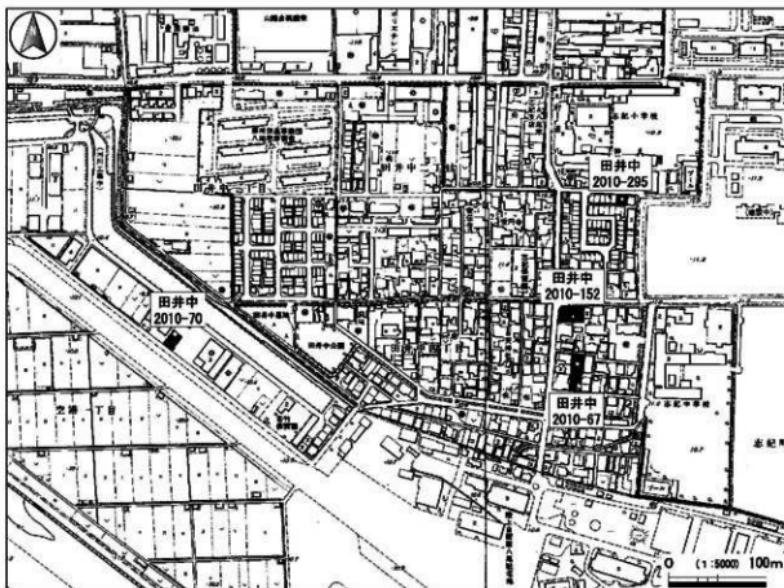
第35図



第36図



第37図



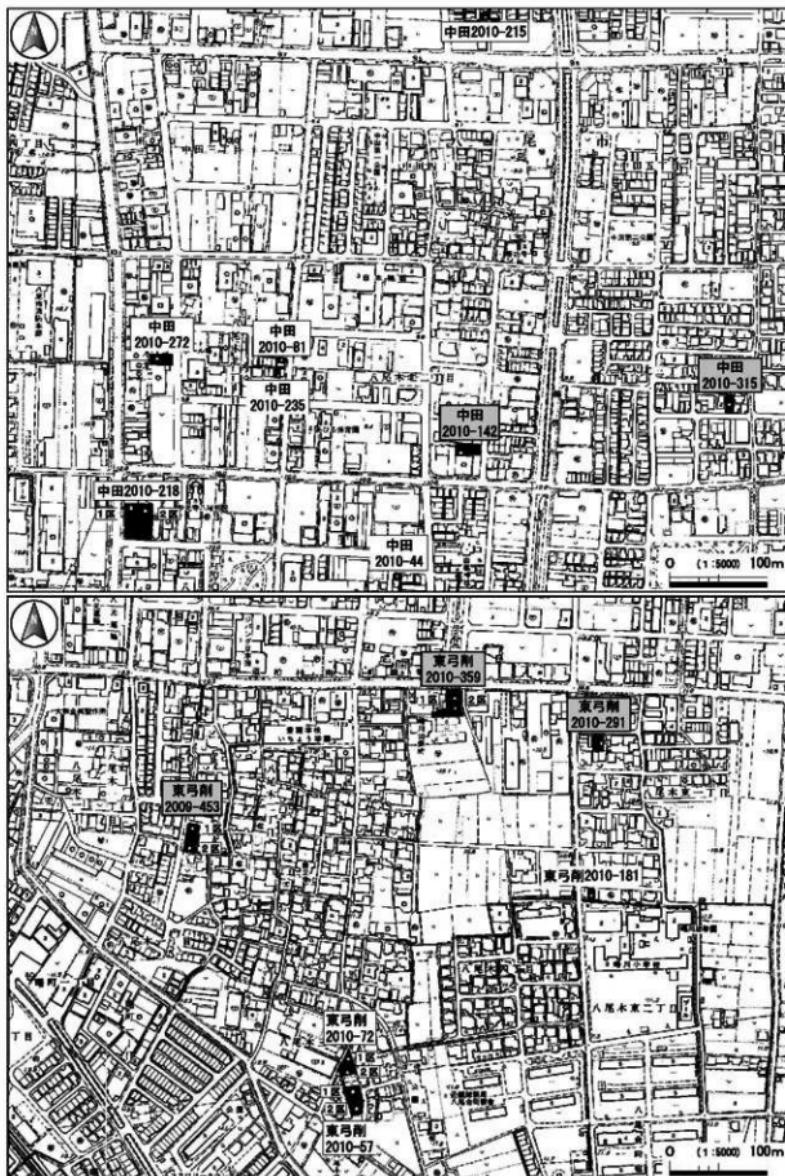
第38図



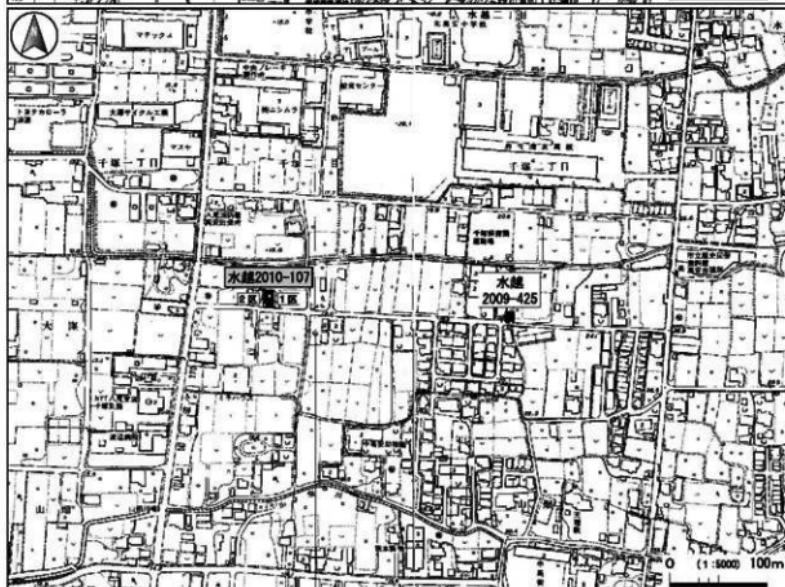
第39図



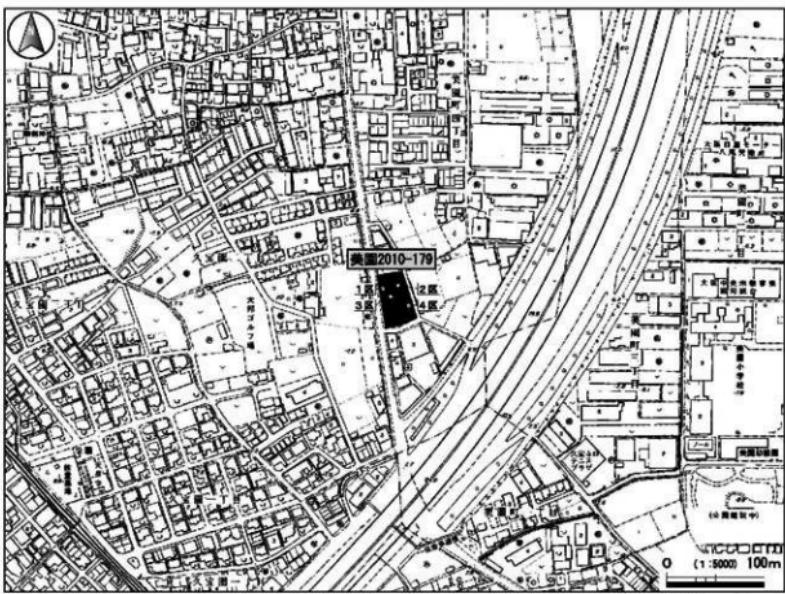
第40図



第41図



第42図



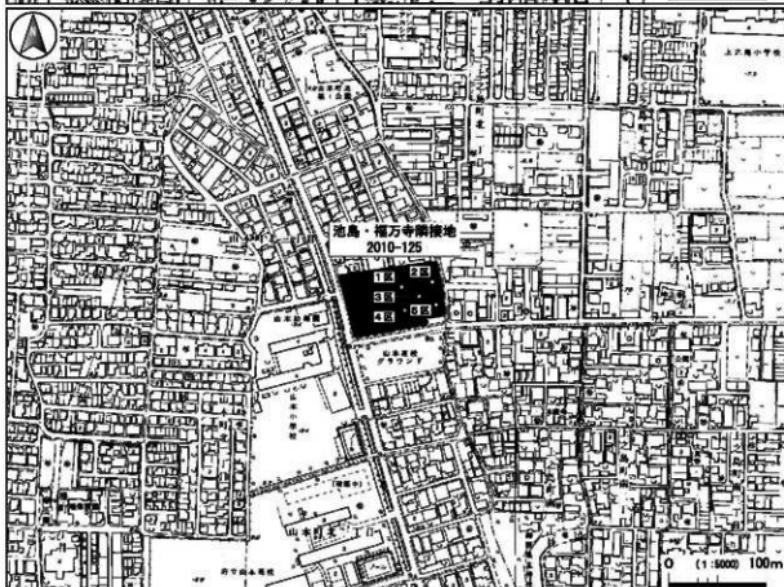
第43図



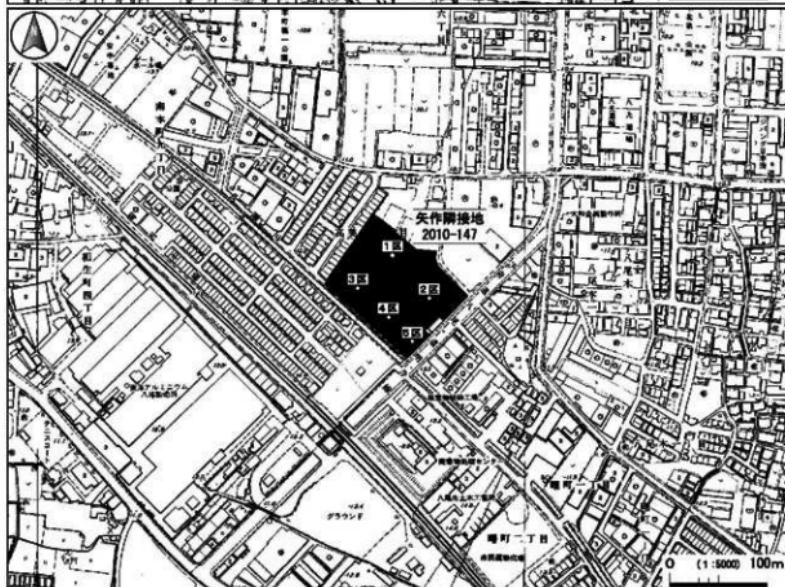
第44図



第45図



第46図



第47図



### 3. 市内遺跡発掘調査報告

#### 1) 跡部遺跡(2010-269)の調査

(1)調査地：春日町三丁目12-1の一部、13-16の一部、13-17（第27図参照）

(2)調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ 、面積約 $4.0\text{m}^2$  5ヶ所（総面積約 $20.0\text{ m}^2$ ）について、現地表（T.P.+9.6~9.7m）下 $2.0\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点 20B 50（調査地南西交差点：T.P.+9.577m）である。

【地層】現地表下 $0.7\text{m}$ 前後までは、客土・盛土層（0層）。以下現地表下 $2.0\text{m}$ 前後までの $1.3\text{m}$ において10層の基本層序を確認した。1層は旧作土層（T.P.+9.0m）である。2~4層は近世以降の作土層と考えられる。5~7層は1区で確認した作土層である。8層は1区で確認した土壤化層（T.P.+8.2m）である。上面においてSD1を検出した。9層は2~5区で確認した河川堆積層（T.P.+8.6m以下）である。須恵器細片を含む。10層は1・2区で確認した湿地性堆積層である。古式土師器細片を含む。

【検出遺構】1区8層上面において、南東~北西方向に伸びる溝（SD1）の南西肩を検出した。北東肩が調査区外に広がるため全容は不明である。検出規模は、幅が $1.5\text{m}$ 以上、深さは約 $30\text{cm}$ である。溝内からは、土師器や須恵器、平瓦が出土した。遺物の帰属年代は坂井奈良時代末~平安時代初頭である。

【出土遺物】SD1出土遺物 1~6は土師器。1は口縁端部が内側に丸く肥厚した杯で、口径は $14.0\text{ cm}$ を測る。ナデ調整後、内面に1段暗文を施す。2は皿。口径は $16.4\text{ cm}$ を測り、ナデ調整で仕上げる。3は口径 $14.8\text{ cm}$ の壺。調整は横ナデである。4・5は甕。4は、肩部外面に横ナデによる段を形成する個体で、口径は $26.0\text{ cm}$ を測る。5は口径 $33.6\text{ cm}$ と大型の個体である。6は鍋と推測される。口径は $36.5\text{ cm}$ で、肩部外面に横位ケズリを施す。7・8は須恵器の壺である。7は口縁端部を若干下方に拡張し平坦面を形成する個体で、口径は $17.6\text{ cm}$ を測る。調整は回転ナデ。8は断面台形の高台が付く個体で底径は $11.0\text{ cm}$ である。9は平瓦。凹面には、布目のほか袋紐の痕跡を認める。凸面は繩目タタキである。側面と凹面側縁は縦位ケズリ、広端面と凸面広端縁は横ナデ、凹面広端縁は横位ケズリを施す。

3区4層出土遺物 10は須恵器小壺の体部～底部である。扁球形を呈する体部の中位や上に円形透孔を1個穿つ。調整は体部下位に回転ヘラケズリが行われる以外は回転ナデである。内面には漆のような付着物を確認した。

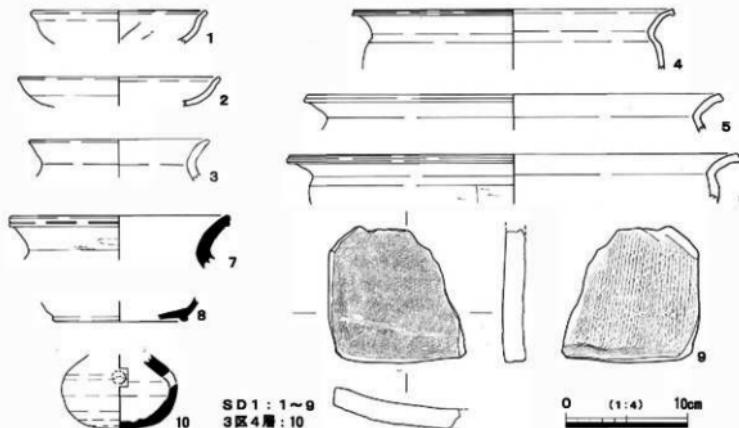


第27図 平・断面図 (S = 1/100)

(3)まとめ：今回の調査では、1区において奈良時代末～平安時代初頭の溝であるSD1を検出した。南西肩を確認したに留まったが、南東～北西方向に直線的に伸びるなどの特徴を有すると推測される。SD1を北西方向に延長した地点では、KH00-33次調査やKH03-52次調査が行われており、当該期の南東～北西方向に直線的に伸びる溝が検出された。この溝とSD1との有機的な関係が考えられる。なお、本調査地の北を南東～北西方向に伸びる市道は、SD1と並行に伸びている可能性が高く、市道の成立時期を知る上で特筆すべき成果と言える。

【参考文献】

- ・成海佳子・樋口薰・金親満夫2001.6「4.久宝寺遺跡第33次調査(KH2000-33)」『平成12年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・樋口 薫2004「13.久宝寺遺跡第52次調査（KH2003-52）」『平成15年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会



第49図 出土遺物実測図

## 2) 恩智遺跡(2010-153)の調査

(1) 調査地：恩智中町二丁目322-6、322-7（第29図参照）

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ 、面積約 $6.25\text{ m}^2$  1ヶ所、平面規模約 $1.0 \times 2.0\text{m}$ 、面積約 $2.0\text{ m}^2$  1ヶ所の計2ヶ所（総面積約 $8.25\text{ m}^2$ ）について、現地表（T.P.+13.1m前後）下 $2.0\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1A271（調査地北東：T.P.+13.137m）である。

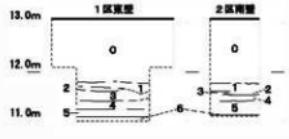
【地層】現地表下 $1.3\text{m}$ 前後までは、客土・盛土層（0層）。以下現地表下 $2.0\text{m}$ 前後までの $0.7\text{m}$ 間ににおいて6層の基本層序を確認した。1・2層は作土層である。3層は層厚 $0.3\text{m}$ を測る河川堆積層である。4層は黒褐色を帯びた土壌化層（T.P.+11.3~11.5m）で、弥生時代後期の土器細片が少量混在する。5層は暗灰色を呈した土壌化層（T.P.+11.1~11.4m）で、弥生時代中期の遺物包含層である。6層は湿地性堆積層と推測される。

【検出遺構・出土遺物】検出遺構はなし。出土遺物は、4層から弥生時代後期と推測される土器細片が少量出土したほか、5層からは弥生時代中期に帰属する土器細片が少量出土した。図化できたのは5層から出土した3点である。1は、壺の口縁部と推測される。外面には波状文が2帯以上施されるほか、内面にはミガキが行われる。2は甕。口縁端部は上外方に拡張し、受け口を成す。頸部内面にはケズリが施される。3は壺又は甕の底部である。外面にはタタキが、内面にはハケナデが施される。底面には切妻と推測される圧痕が見える。いずれも胎土には角閃石が混在する。

(3) まとめ：今回の調査の南東約 $100\text{m}$ で行われた恩智2008-230調査では、弥生時代後期前半の遺物包含層1と中期後半の遺物包含層2を検出したほか、それぞれの時期の遺構群の存在を確認した。今回の調査における4層が遺物包含層1に、5層が遺物包含層2に相当するものと思われる。4・5層に混在していた土器は細片であり、出土量も少ないとから勘案すると、居住城の中心とは言い難い。恩智2008-230調査で確認された居住城の北西端に位置する可能性を指摘しておく。

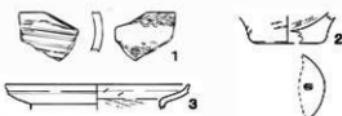
### 【参考文献】

- ・坪田真一・吉田珠己2010.3「II 平成21年度市内遺跡発掘調査報告(平成21年4月～12月) 3. 市内遺跡発掘調査報告
- 6) 恩智遺跡(2008-230)の調査』『八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書 八尾市文化財調査報告61 平成21年度国庫補助事業』八尾市教育委員会



- 0: 客土・盛土層
- 1: 鹿オーリープ色細粒砂～細粒泥質粘土質シルト～シルト(作土層)
- 2: 鹿オーリープ色細粒砂～細粒泥質粘土質シルト～シルト(作土層)
- 3: にぶい黄褐色シルト～中粒砂(河川堆積層)
- 4: 黒褐色細粒砂～細粒泥質粘土質シルト(土壌化層)
- 5: 暗褐色細粒砂～細粒泥質粘土質シルト(土壌化層)
- 6: 紅色粘土質シルト～シルト(湿地性堆積層)

第50図 断面図(S=1/50)



0 (1:4) 10cm  
1区5層: 1・2  
2区6層: 3

第51図 出土遺物実測図

### 3) 恩智遺跡(2010-175)の調査

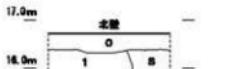
(1) 調査地：恩智中町三丁目126番6（第29図参照）

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ 、面積約 $6.25\text{m}^2$  1ヶ所について、現地表(T.P.+16.7m前後)下 $0.8\text{m}$  前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点 10E37(天王の杜の北: T.P.+18.574m)である。

【地層】現地表下 $0.3\text{m}$ 前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下 $0.8\text{m}$ 前後までの $0.5\text{m}$ 間において基本層序を1層確認した。1層は、黒褐色を呈した弥生時代中～後期の遺物包含層(T.P.+16.4m)である。

【検出遺構・出土遺物】検出遺構はなし。出土遺物は、1層から弥生時代中～後期の土器細片が出土した。いずれも細片のため図化は不可であった。

(3)まとめ：今回の調査では、0層直下において弥生時代中～後期の遺物包含層(1層)が存在することを明らかにした。層厚が $0.5\text{m}$ 以上を測ることや、土壤化が顕著であることなどから、1層の下位において当該期の遺構が検出される可能性が高いと思われる。周辺を調査する際には注意されたい。



○：客土・盛土層  
1：黒褐色堅致砂—縦断面致土質シルト(遺物包含層)  
S：黒褐色堅致砂—中堅致土質シルト(近代以前のゴミ堆棄坑)

第52図 断面図(S = 1/100)

#### 4) 亀井遺跡(2010-40)の調査

(1) 調査地：南龜井町一丁目38番地3・4・5（第30図参照）

(2) 調査概要：平面規模約3.0×3.0m、面積約9.0m<sup>2</sup>2ヶ所（北から1・2区 総面積約18.0m<sup>2</sup>）について、1区は現地表（T.P.+9.3～9.4m）下3.0m前後まで、2区は2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点20B68（調査地西40m地点：T.P.+9.004m）である。

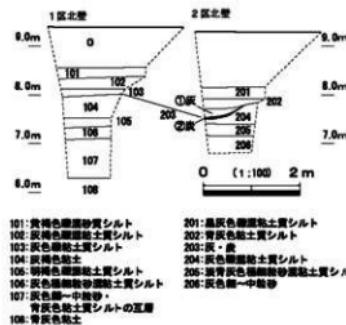
【地層】1区：盛土の厚さは0.8m程度、101層上面の標高は8.7～8.8m前後である。101～105層は褐色系の粘土質・砂質シルトで、104層には酸化マンガン、105層には酸化鉄が含まれる。いずれも搅拌されていることから、作土と考えられる。106層灰色極細粒砂混粘土質シルト・107層灰色細～中粒砂・青灰色粘土質シルトの互層は河川流出土で、含水量が多い。108層青灰色粘土は河川底で、上面の標高は6.3mを測る。2区：盛土の厚さは1.0m前後、調査区のほとんどが深さ2.0mに及ぶ搅乱であった。2区ではグライ化した灰色系の地層が堆積する。101層は水田作土で、上面の標高は8.15m前後である。102層は床土にあたる。203層は灰・炭からなる遺構埋土である。構築面である204層上面の標高は7.8m程度である。以下、205・206層は河川流出土で、1区同様含水量が多い。

【検出遺構・出土遺物】1区：103層から平安時代頃の土師器、106層から古墳時代の古式土師器が出士している。2区：203層は炉址の可能性がある。北側壁面の観察では、204層上面で、幅0.8m・深さ0.2m程度落込むのを確認した。203-①は礫混粘土質シルトに灰が混在した状態、203-②は炭層で、5cm程度の厚さで底に貼りついた状態である。

(3)まとめ：今回の調査では、北側の1区で古墳時代・平安時代の土器、南側の2区で炉址の可能性のある遺構を検出した。近隣の調査成果から、104・204層は平安時代の遺構ベースに、106・205層は古墳時代中期の遺物包含層に、107・206層が古墳時代中期以前の埋没河川に対応するものと考えられる。なお、近隣の調査では、埋没河川以下の標高5.2～6.9mで、弥生時代の複数時期の遺構面が検出されている。

##### 【参考文献】

- ・近江俊秀1989.4『亀井遺跡—南龜井町4丁目41-1の調査—』（財）八尾市文化財調査研究会報告19』（財）八尾市文化財調査研究会
- ・成海佳子・河村恵理2007.3『亀井遺跡(第2次調査)』『（財）八尾市文化財調査研究会報告101』（財）八尾市文化財調査研究会



第53図 断面図(S=1/100)

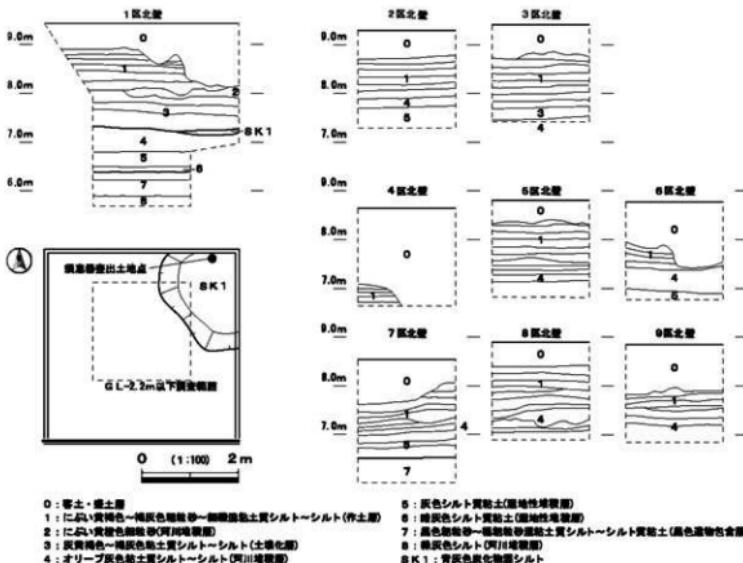
## 5) 亀井遺跡(2010-185)の調査

(1) 調査地：南亀井町二丁目4-1、4-3、4-4、7-1、7-2、8-1、10-1、10-2、16、17、18、19、21（第30図参照）

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ 、面積約 $4.0\text{ m}^2$  8ヶ所、平面規模約 $4.0 \times 4.0\text{m}$ 、面積約 $16.0\text{ m}^2$  1ヶ所の計9ヶ所（総面積約 $48.0\text{ m}^2$ ）について、現地表（T.P.+8.5～9.4m前後）※南西に位置する7区が最も低く、北端の1区が最も高い）下 $2.0\sim3.5\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点20A03（調査地北東国道25号線沿い：T.P.+9.147m）である。

【地層】現地表下 $0.5\sim1.5\text{m}$ 前後までは、客土・盛土層、及び擾乱（0層）。以下現地表下 $2.0\sim3.5\text{m}$ 前後までの $0.5\sim3.0\text{m}$ において8層の基本層序を確認した。1層は、中世以降の作土層である。2層は、1区で確認した河川堆積層である。3層は1・3区に認められる土壤化層（T.P.+7.7～8.0m）である。土師器や須恵器の細片が混在する地層で、3層に細分できた。4層は、調査地の中央から東方に流芯をもつと推測される河川堆積層である。1区では、本層上面において奈良時代の土坑を検出した。5・6層は湿地性堆積層である。この内、1区で確認した6層には、植物遺体が多量に含まれていた。7層は、1・7区で確認した黒色遺物包含層（T.P.+6.4～6.5m）である。弥生土器が出土した。層厚は約 $50\text{ cm}$ 。8層は1区で確認した河川堆積層である。湧水が激しい。

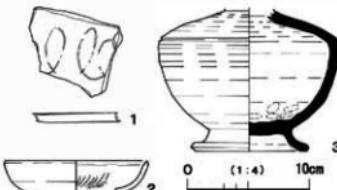
【検出遺構】1区の4層上面（T.P.+7.3m）において土坑を1基（SK1）検出した。北部と東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出規模は、東西長 $1.7\text{m}$ 以上、南北長 $2.1\text{m}$ 以上、深さ $0.1\text{m}$ 前後を測る。埋土は、炭化物の混在する青灰色シルトの単層で、土師器や須恵器が少量出土した。



第54図 平・断面図 ( $S = 1/100$ )

【出土遺物】1区SK1出土遺物 1・2は土師器。

1は皿の底部と推測される。内面には連弧状暗文が施される。2は杯。口縁端部内面に小さな段を形成する個体で、口径は11.6 cmを測る。内面には1段暗文が見える。3は須恵器台付長頸壺である。口頸部を欠くが、肩部が張り、「ハ」の字に開く高台が付く。いずれも飛鳥～奈良時代(7世紀後半～8世紀前半)の所産と考えられる。

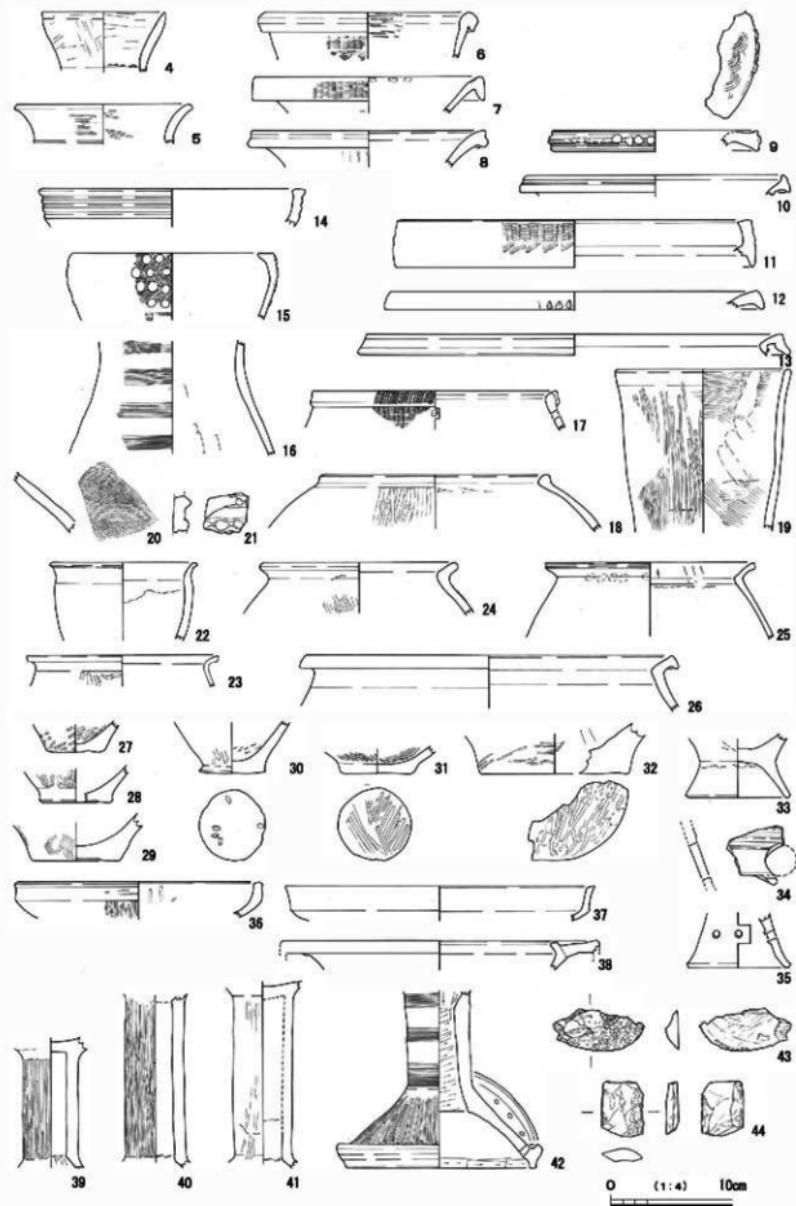


第55図 出土遺物実測図

1区7層出土遺物 4～21は壺である。4は短頸壺。口縁部は内湾気味に開き、端部には直立する平坦面が形成される。調整は板ナデである。口径は10.0 cmを測る。5～12は広口壺。5は外反する口縁部と、外傾する平坦面を作る個体で、口径は14.4 cmを測る。調整は横位ミガキである。6～8は外反する口縁部と、下方に拡張した端部を有する個体である。口径は17.0～19.0 cmである。この内6の口縁部外面には廉状文と扇形文が、7の口縁端部外面には廉状文と刺突文が施される。9・10は大きく開く口縁部と上下に拡張した端部を有する個体である。9は直立する端面に凹線文を施した後、円形浮文を張り付けるほか、口縁端部内面には扇形文が施される。11は端部を上方に大きく拡張し受け口を形成するほか、下方にも拡張する個体である。幅広の端面には廉状文と扇形文が各1帯施される。12は大きく開く口縁部と下方に拡張した端部を有する個体で、端部にはキザミ目を入れる。13は口縁部が短く開き、端部を下方に拡張させ、外傾する幅広の平坦面を形成する個体で、口径は34.0 cmを測る。鉢の可能性も考えられる。14は受け口状の口縁部を形成する個体である。外面には凹線文が施される。口径は21.3 cmである。15は太頸壺と推測される。口縁部は、端部附近で内湾する。端部は内厚し、上面に平坦面が形成される。外面には各段で直角に変じた櫛描烈点文が3帯施された後、円形浮文を貼り付けるほか、廉状文も見える。口径は16.2 cm。16は長頸を呈する個体である。外面には直線文が4帯以上施される。17・18は無頸壺と考えられる。17は段状口縁を形成し、幅広の端面にはヘラ状工具による刺突文を加えるほか、肩部外面には廉状文を施す。口径は19.9 cm。18は口径が18.2 cmを測る個体で、肩部外面は縦位ミガキを施す。内面はケズリを行う。19は直線的に長く伸びた口縁部を有する個体である。外面は縦位ミガキ、内面は横位～斜位にハケナデを施す。口径は13.8 cm。20は肩部付近の細片である。外面には櫛描直線文や櫛描による面違風な鋸歯文が施される。21は外面に2帯の貼り付け突帯が見える。

22～33は甕である。22は小さく外反した口縁部をもつ個体で、口径は11.5 cmである。23は内傾気味の端面を有する個体で、口径は15.6 cm。24は短く、大きく開いた口縁部を有する個体で、口径は15.5 cmを測る。25は直立した端面に凹線文を施す。口径は17.1 cmである。26は端部を上下に拡張した個体で、口径は29.9 cmと大型である。27～32は体部下位～底部の細片である。若干上げ底の個体(27～29)と平底(30～32)に分類される。外面調整は、タタキ(27)やミガキ(28～32)である。内面はハケナデが主体を成す。31・32は底面にもミガキが施されるほか、30の底面には初圧痕を確認した。33は脚台部である。体部外面にはタタキが見える。34・35は器台と推測される。34は、外面に凹線文が施されるほか、円形透孔を穿つ。35にも円形透孔を認める。

36～42は高杯である。36・37は口縁部が直口する個体である。口縁部は横ナデを行うほか、36の杯部外面にはミガキが施される。口径は36が19.8 cm、37が25.3 cmである。38は水平口縁を形成する個体で、内面の突帯は若干内傾し、端部は直角に垂下する。口径は25.5 cmを測る。39～42は柱状部が筒状を呈する個体である。39～41の外面には縦位ミガキが施される。42は「ハ」の字に開いた裾部を有する。裾端部は上下に拡張を行い、内傾の平坦面が形成される。柱状部外面にはナデ調整後、沈線文帯が3帯以上施される。裾部外面にはミガキを行い、端部付近に円形透孔を複数穿っている。内面はナデのほか、横位ケズリが認められる。



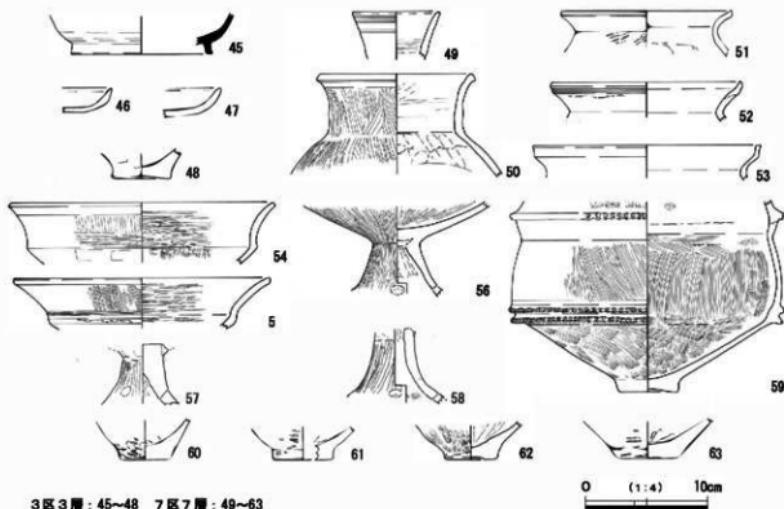
第56図 出土遺物実測図

43・44はサスカイト製の石製品である。いずれも未製品であるが、部分的に刃が形成される。これらの遺物の帰属年代は、弥生時代中期後半に比定される。

3区3層出土遺物 45は須恵器の杯と推測される。高台は「ハ」の字を開く。46・47は土師器の皿の細片。調整はナデが主体であるが、46の底部外面はケズリを行う。3者は飛鳥～奈良時代(7世紀後半～8世紀前半)の所産と考えられる。48は弥生～古式土師器の壺または甕の底部である。底面は若干上げ底を成す。

7区7層出土遺物 49・50は短頸壺。49は口縁部が直線的に開く個体で、外面には沈線文が施される。口径は7.0cmである。50は口縁部が外反気味に開き、外傾の平坦面を形成する個体で、外面には縦位ミガキが密に施される。口径は12.3cmを測る。51～53は甕。端部を若干つまみ上げる個体(51・52)と受け口を形成する個体(53)に区分される。51の肩部外面にはタタキが見える。口径は51が13.9cm、52が15.4cm、53が18.6cmである。54～58は高杯。54・55は有稜高杯である。稜は明瞭で、口縁部は大きく外反する。調整は内外面ともにミガキを主体とする。口径は54が21.4cm、55が20.8cmである。56～58は、外面に縦位ミガキを密に施した個体で、「ハ」の字に開いた柱状部の下位には円形透孔を穿っている。59は手焼き形土器。覆部は部分的にしか残存しておらず、不明な点が多い。鉢部はハケナデ調整が行われ、最大径付近にキザミを加えた突帯を2帯張り付けている。覆部にも同様の突帯が認められる。残存高は15.6cmを測る。60～63は壺または甕の底部である。底面が平底を呈する個体(60・61)とドーナツ底を呈する個体(62・63)に区分される。外面調整はタタキ(60・61・63)のほか、ミガキ(62)が確認できた。これらの遺物の帰属年代は、概ね弥生時代後期後半に比定される。

(3)まとめ：今回の調査では、1区で弥生時代中期後半、7区で後期後半の黒色遺物包含層を検出したほか、1区では飛鳥～奈良時代に比定されるSK1を検出するなどの成果を得た。特に弥生時代の黒色遺物包含層については、本調査地の南西約100mで行われた(財)大阪文化財センターによる龜井遺跡の調査でも同様の黒色遺物包含層を検出しており、今回の成果によって黒色遺物包含層の分布範囲が



第57図 出土遺物実測図

北東方向に広がることが明らかになった。遺物の出土量や遺存状況から勘案すると、1・7 区周辺において弥生時代の遺構が検出される可能性が高いと考えられる。古代に関しては、亀井遺跡内での検出例が少ないとことから、今後周辺で調査が行われる際には注意が必要と思われる。

【参考文献】

- ・堀江門也他1980『亀井・城山』(財)大阪文化財センター
- ・中西靖人他1984『亀井遺跡II』(財)大阪文化財センター

## 6) 葦振遺跡(2010-239)の調査

(1)調査地：北本町三丁目163番3（第31図参照）

(2)調査概要：平面規模 $2.0 \times 2.0\text{m}$ 、面積約 $4.0\text{ m}^2$ 3ヶ所（東から1～3区 総面積約 $12.0\text{ m}^2$ ）について、現地表（T.P.+7.4～7.6m）下 $2.0\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1032A（調査地の南：T.P.+7.466m）である。

【地層】1区 現地表下 $0.9\text{m}$ 前後までは、整地に伴う客土・盛土層（0層）。以下現地表下 $1.25\text{m}$ までに10層の基本層序を確認した。1層は作土層、2層はやや不均質の砂質シルトで、遊離した二次堆積に伴う遺物を含む。3層はグライ化が顕著な砂質シルト。4層は砂質シルトで中世時期の遺物を極少量含む。5層は砂質シルト。6・7層は酸化鉄斑が認められる砂質シルト。8・9層は細粒砂が混じる砂質シルト。10層は酸化鉄斑が認められる粘土層である。

2区 現地表下 $1.0\text{m}$ 前後までは、整地に伴う客土・盛土層（0層）。以下現地表下 $1.05\text{m}$ までに8層の基本層序を確認した。1層は作土層。2層は1区の2層に対応。3層はグライ化した砂質シルト。4層は1区の4層に対応し鎌倉時代の瓦器焼片を極少量含む。5層は細粒砂が混じる砂質シルト。6層は砂質シルト。7・8層は細粒砂へ中粒砂が優勢な水成層。

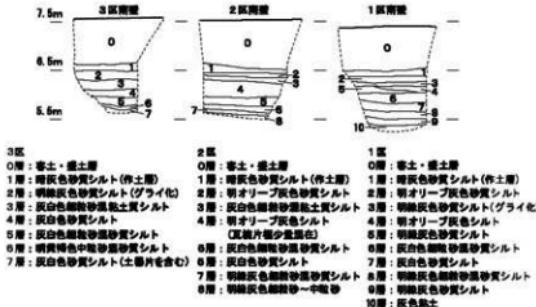
3区 現地表下 $1.05\text{m}$ 前後までは、整地に伴う客土・盛土層（0層）。以下現地表下 $1.1\text{m}$ までに7層の基本層序を確認した。1層は作土層。2層は1区の3層、2区の3層に対応。3層は2区で検出した中世遺物を含む4層に対応するものと推定されるがこの地点での遺物出土は無い。4層は砂質シルト。5層は1区の6層、2区の5層に対応。6層は中粒砂が混じる砂質シルト。7層は砂質シルトで時期不明の土器片を含むもので、溝等の埋土になる可能性がある。

【検出遺構・出土遺物】1区の4層および2区の4層から、鎌倉時代後半の土師器・瓦器焼の細片が極少量出土したほか、3区の7層から時期不明の土器片が出土した。いずれも細片のため図化は不可。

(3)まとめ：1・2区では、鎌倉時代後半の土師器・瓦器焼片を極少量含む4層遺物包含層を確認した。中世時期の遺物については、調査地点の西側に位置し、明治期以降に「河内街道」と称された街道との有機的な関係が推定される。この街道については、中世の八尾市域に於ける主要都市である葦振、八尾、久宝寺を南北に結ぶ主要幹線道路であり、八尾に近接したこの地点付近にも中世集落が展開していた可能性がある。

### 【参考文献】

- 柳橋利光1989「京街道」『歴史の道調査報告書 第五集』大阪府教育委員会



第58図 断面図(S=1/100)

## 7) 久宝寺遺跡(2009-488)の調査

(1) 調査地：南久宝寺2丁目29番(第33図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0$ m、面積約 $4.0 \text{ m}^2$ 4ヶ所(北西から1～4区 総面積約 $16.0 \text{ m}^2$ )について、現地表(T.P.+8.6～9.0m)下 $1.6 \sim 2.0$ mを調査した。調査で使用した標高の基準は、八尾市街区多角点20B14(調査地南東部：T.P.+8.911m)である。

【地層】0層は盛土層及び搅乱。以下現地表下 $1.6 \sim 2.0$ mまでの $1.2 \sim 1.6$ m間ににおいて10層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+8.1～8.6m)で、4区が高く、1区では厚い。2・3層(T.P.+7.9～8.1m)は搅拌された作土層で、時期は中世～近世であろう。1・3区で見られた。4・5層は2・4区で見られた。4層(T.P.+8.3～8.5m)はブロック状を呈し、やや固く締まる層相で、整地層の可能性がある。5層(T.P.+8.1～8.3m)もブロック状で、中世頃の遺物包含層である。4区北壁では下面で遺構が見られた。6層以下は河川堆積層である。6～9層(T.P.+7.3～7.8m)は3区でのみ見られたシルト質粘土～中粒砂、10層(T.P.+8.1m以下)は細粒砂～細礫である。

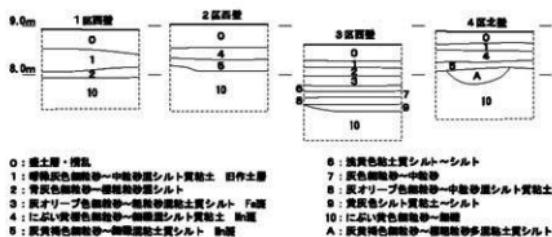
【検出遺構】平面的には検出できなかったが、4区北壁において東西 $1.3$ m・深さ約 $30$ cmの土坑状の遺構を確認した。

【出土遺物】3区3層から時期不明の土器片、2・4区5層から12世紀代に比定される土器器皿・瓦器焼等が少量出土した。1は4区5層出土の土器器皿である。

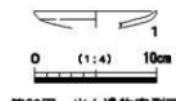
(3)まとめ：まとめ：調査地中央部の2・4区で中世頃(12世紀代)の遺物包含層・遺構を検出した。東部の調査地においても同レベルで11世紀代の遺構が検出されており、中世の集落域の広がりが確認された。

### 【参考文献】

- ・坪田真一2010「13) 久宝寺遺跡(2009-302)の調査」『八尾市内遺跡平成21年度発掘調査報告書』八尾市文化財調査報告61 平成21年度国庫補助事業』八尾市教育委員会研究会



第59図 断面図(S=1/100)



第60図 出土遺物実測図

## 8) 久宝寺遺跡(2010-27)の調査

(1) 調査地: 北久宝寺3丁目63番及び57番、60番、62番の各一部  
(第32図参照)

(2) 調査概要: 平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ 、面積約 $6.25\text{ m}^2$ 2ヶ所(北から1・2区 総面積約 $12.5\text{ m}^2$ )について、現地表(T.P.+7.6m)下 $2.7\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使用した標高の基準は、八尾市街区補助点4A236(調査地南西部:T.P.+7.674m)である。

【地層】0層は客土・盛土層。

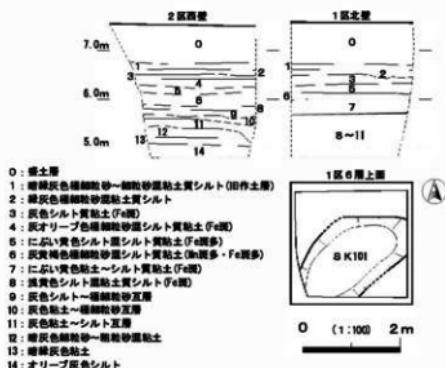
以下現地表下 $2.7\text{m}$ 前後までの1.9m間において14層の基本層序を確

認した。1層は旧作土層(T.P.+6.6~6.7m)。2層(T.P.+6.5~6.6m)は搅拌されグライ化した作土層で、時期は近世であろう。3~5層(T.P.+6.1~6.5m)はよく搅拌され均質なシルト質粘土基調の層相で、古代~中世頃の作土層と考えられる。6層(T.P.+5.9~6.1m)、及び1区7層(T.P.+5.7~6.0m)は、炭やMn斑・Fe斑を多く含む土壤化層である。6層上面が第1面。8~11層は粘土~極細粒砂の河川堆積層である。2区南部ではT.P.+5.4~5.9mに見られ、北に落ち込んでいる。1区ではT.P.+5.7m以下に当たる。12層以下は2区でのみ見られ、1区では8~11層の河川により削平されている。12層(T.P.+5.2~5.4m)は弥生時代後期~古墳時代初頭の遺物包含層で、土壤化している13層(T.P.+5.1~5.2m)上面が該期の生活面と考えられるが、遺構は認められなかった。14層(T.P.+5.1m以下)のシルト層は水成層である。

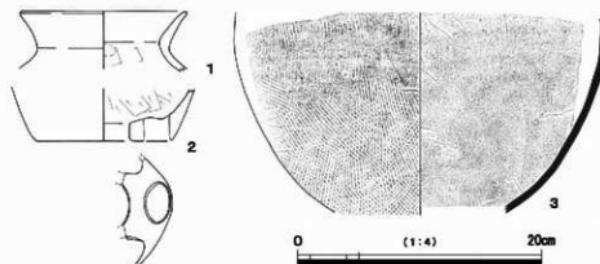
【検出遺構】1区6層上面(T.P.+6.1m)で古墳時代中期の土坑1基(SK101)を検出した。平面不定形で、規模は東西2.2m・南北1.6m以上・深さ約28cmを測る。埋土は炭を含むブロック状の単一層で、底面には炭層も見られた。遺物は土師器・須恵器が出土している。

2区12層(T.P.+5.2~5.4m)からは弥生時代後期~古墳時代初頭(庄内式期)の土器が少量出土した。

【出土遺物】SK101-1~3を図化した。1は土師器甕、2は瓶である。2の底部蒸気孔は中央が円



第61図 平・断面図(S=1/100)



第62図 出土遺物実測図

形、その周囲に椭円形(5個?)という配置である。3は須恵器壺の底体部で、外面平行タタキ後回転力キ目、内面は同心円タタキをナデ消す。

(3)まとめ：調査では北の1区で古墳時代中期の土坑、南の2区で弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物包含層を検出した。古墳時代中期の遺構は西部の調査地(久宝寺北Fトレンチ)でも確認されており、同じ集落域と考えられる。

#### 【参考文献】

- ・中西靖人他1987『久宝寺北(その1～3)』(財)大阪文化財センター

### 9) 久宝寺遺跡(2010-249)の調査

(1)調査地：神武町122-1・183 (第33回参照)

(2)調査概要：平面規模約3.0×5.0m、面積約15.0 m<sup>2</sup> 5ヶ所(西から1～5区 総面積約75.0 m<sup>2</sup>)について、現地表(T.P.+7.8m前後)下3.0～3.5mまでを調査した。調査で使用した標高の基準は、設計図面記載のK.B.M=0.000m(T.P.+7.491m)である。なお、5区では盛土層・搅乱が深くまで及んでいたほか、1～4区は地下構造物が存在したため部分的な調査となった。

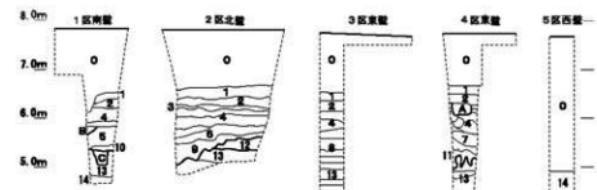
【地層】0層は客土・盛土層。5区では0層が現地表下約2.8m(T.P.+4.9m)まで及び、下部はヘドロ状の層相であった。以下14層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+6.4～6.7m)。2層(T.P.+6.1～6.5m)は搅拌された作土層で、時期は中世～近世であろう。4区では下面で南北方向の耕作溝(A)が見られた。3層(T.P.+6.2m前後)は2区でのみ見られた水成層。4層(T.P.+5.7～6.3m)は全域で見られた搅拌された作土層である。4区ではブロック状の複雑な堆積が見られ遺構の可能性もある。5層(T.P.+5.4～5.8m)は1区、6層(T.P.+5.4～5.8m)は2区で見られた水成層。7層(T.P.+5.0～5.4m)は4区で見られ、水成層と思われるがややブロック状で、作土層あるいは遺構埋土の可能性がある。8層(T.P.+5.2～5.6m)は3区で見られた湿地性堆積層。9・10層(T.P.+5.3～5.7m)は1・2区で見られた古墳時代前期の遺物包含層で、2区ではS O221 埋土となり西に落ち込む(T.P.+5.0m)。11層(T.P.+5.0～5.4m)は4区で見られた古墳時代初頭の遺物包含層である。下面の凹凸が著しく作土層あるいは遺構埋土の可能性がある。12層(T.P.+5.3～5.6m)は2区で見られた古墳時代初頭の遺物包含層である。13・14層は水成層である。

#### 【検出遺構・出土遺物】

第1面-1区5層上面(T.P.+5.85m)で井戸1基(S E111)を検出した。断面逆台形で埋土はブロック状の5層からなる。11世紀頃の土師器皿の他、骨片が出土した。1は「て」の字口縁の土師器皿である。

第2面-1区13層上面(T.P.+5.35m)でビット2個(S P121・122)、2区12層上面(T.P.+5.6m)で落ち込み1基(S O221)を検出した。ビットの平面形はS P121が長円形、S P122は円形と思われる。S P121は南部をS E111に削平されており、規模は東西約47cm・深さ約8cmを測る。S P122は東西約60cm・深さ約30cmを測る。共に断面逆台形で、埋土はブロック状の単一層である。S P121から布留式期頃の土器片が出土している。S O221は南北方向の肩から西に落ち込むもので、深さ0.6m以上を測る。古墳時代初頭～前期(庄内式新相～布留式古相)の土器片が出土した。2・3は同一個体と思われる有稜高杯である。調整はヘラミガキで、脚底部に円孔を有する。

4層-古代～中世の土器・須恵器・瓦器片が少量出土。1区10層、2区9層-布留式期までの土器が出土。4は2区9層出土の小形丸底土器で、調整はナデである。庄内式期に比定される。2区12層、3区8層、4区11層-庄内式期までの土器出土。5・6は4区11層出土のV様式系壺の底部である。調整は平行タタキで、5は底部に黒斑を有する。



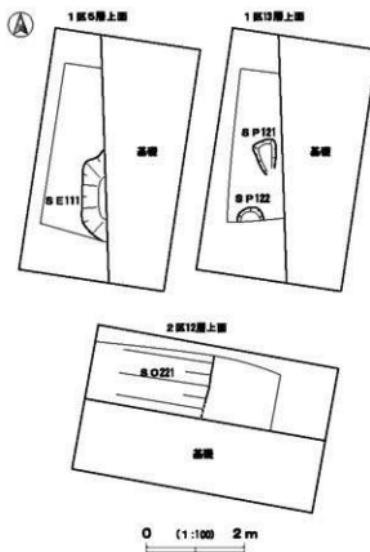
- 0：褐色層・樹皮  
 1：褐色細粒砂質土質シルト(作土層)  
 2：オーリーブ灰色細粒砂質シルト質粘土(作土層)  
 3：灰色シルト・褐色細粒砂質シルト質粘土(作土層)  
 4：褐色細粒砂質シルト質粘土質シルト Fe面富多(作土層)  
 5：褐色細粒セシルト・互層(火成岩)  
 6：灰色シルト・褐色細粒互層(火成岩)  
 7：灰褐色シルト質粘土・細粒砂質 ブロック状  
 8：灰褐色細粒土・シルト質土互層 ラミナ状に鉄化物(區域性鉄化)  
 9：オーリーブ灰色細粒砂質シルト質粘土(土壤化層・S E221地層)  
 10：灰褐色細粒土質シルト 土壤化層  
 11：灰褐色細粒土質粘土・互層(土壤化層)  
 12：褐色細粒砂質シルト質粘土(土壤化層)  
 13：オーリーブ灰色細粒土・互層(土壤化層)  
 14：灰色シルト・褐色細粒砂質シルト質粘土(土壤化層)  
 A：操作層 褐色細粒砂質シルト質粘土 Fe面 ブロック状  
 B：S E111  
 C：S P122 オーリーブ灰色シルト質粘土 ブロック状

第63図 断面図(S=垂直1/100、水平1/200)



- ア：灰褐色細粒砂質シルト ブロック状 Fe面  
 イ：灰褐色細粒砂質シルト質粘土シルト ブロック状  
 ウ：に灰い黄褐色シルト ブロック状 Fe面  
 エ：灰褐色シルト質粘土シルト ブロック状  
 オ：灰褐色シルト質粘土シルト ブロック状

第64図 S E111断面図(S=1/100)



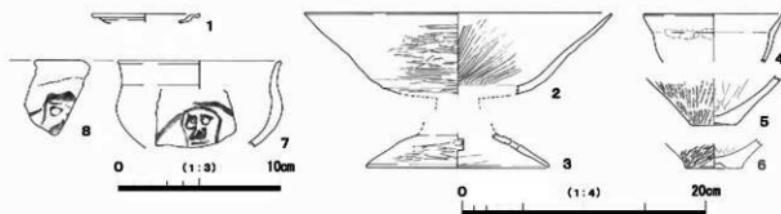
第65図 平面図(S=1/100)

2区で奈良～平安時代に比定される墨書き人面土器片(7・8)が出土しており、おそらく6層に帰属すると考えられる。7・8は復元口径10.0cmを測る小形の蓋で、同一個体と考えられる。口縁端部が外方に肥厚し、調整は口縁部ヨコナデ、体部ナデである。8については詳細不明であるが、7に描かれた人面は非常に滑稽な人相といえよう。

(3)まとめ：調査では周辺の調査地と同様に、1・2・4区で古墳時代初頭～前期の遺構を検出した。また1区で平安時代の遺構を検出した他、2区では6層から墨書き人面土器が出土しており、調査地西部一帯には当該期の集落が存在する可能性がある。なお2区6層については、南部の第22次調査2調査区で検出されている奈良時代末～平安時代前期の溝SD-14との有機的な関連が考えられる。

【参考文献】

- 原田昌則2001『久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書—大阪竜華都市拠点地区区画道路2号線に伴う—（財）八尾市文化財調査研究会報告68』（財）八尾市文化財調査研究会



第66図 出土遺物実測図

## 10) 久宝寺寺内町(2009-48)の調査

(1) 調査地：久宝寺3丁目139番・142番(第32図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 2.0×3.0m、面積約 6.0 m<sup>2</sup> 1ヶ所について、現地表(T.P.+8.7m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点 4B004(調査地南西)：T.P.+8.496mである。

【地層】現地表下 2.0m 前後まで 11 層の基本層序を確認した。1 層は近～現代の整地層(T.P.+8.4 ~8.7m)である。2・3 層は近代の整地層である。この内 2 層上面において SK1 を検出した。4・5 層は 18 世紀代の遺物を包含する整地層である。6 層は 17 世紀代の整地層と推測される。7 層は焼土塊を多量に含む整地層である。上面において SD1 を検出した。8 層は湿地性堆積層である。9～11 層はラミナ構造を有する河川堆積層である。

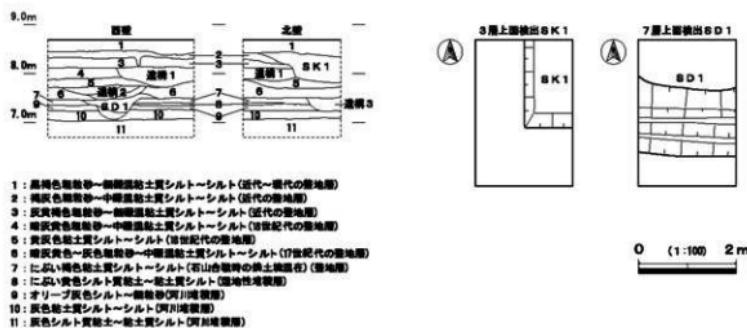
【検出遺構】2 層上面において SK1 を、7 層上面において SD1 を検出した。SK1 は、北と東が調査区外に至るため、全容は不明であるが、概ね南北に主軸を持つ方形掘形の土坑(東西幅：1.0m 以上南北長：1.7m 以上 深さ：約 0.5m)と推測される。埋土は、炭化物の混在するブロック土からなり、近代～現代の遺物が多く混在していた。ごみ捨て穴であろう。SD1 は 7 層上面において検出した溝である。東西に伸びるもので、幅は約 1.1m、長さは 2.0m 以上の規模を有する。埋土は砂礫優勢の 2 層からなり、深さは約 0.4m を測る。出土遺物はなし。

【出土遺物】2 層出土遺物 1 は左巻三巴文軒丸瓦。巴文は巴頭が円頭化し、尾は長い。巴尾は他の巴胴に接しない。外区には半球状の珠文 15 個を密に配する。周縁部の幅は広い。丸瓦は瓦当裏面の上半分に取り付く。巴頭の一部に範傷が認められる。

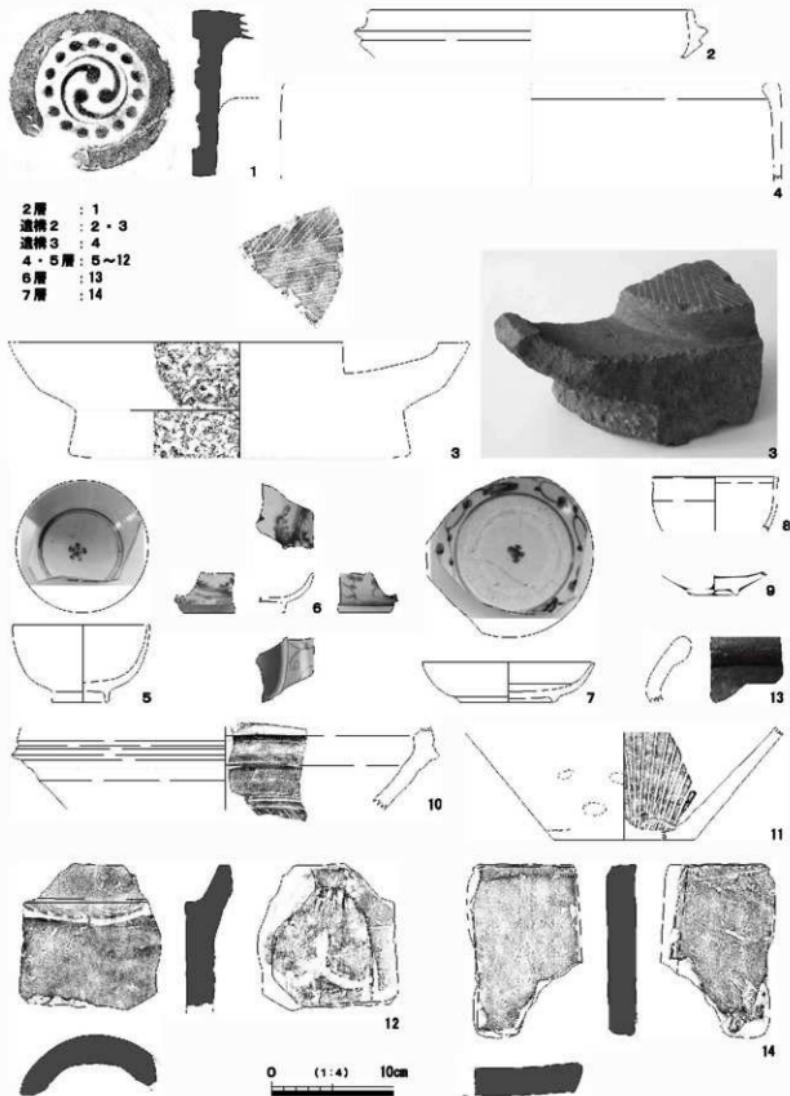
遺構 2 出土遺物 2 は土師器炮焼。短い口縁部の下位に断面三角形の凸帯を貼り付けるもので、口径は 26.0 cm を測る。奈良盆地中・南部産と推測され、18 世紀初頭以降の所産である。3 は石製碾臼の下臼である。目は 8 分画 10 槽と推測される。側面には鑿の痕跡が見える。茶臼であろう。

遺構 3 出土遺物 4 は瓦質土器の火鉢。口縁部はほぼ直立し、口径は 40.4 cm を測る。

4・5 層出土遺物 5 は染付碗。見込みには五弁花文様がコンニャク判により施される。口径は 11.0 cm である。6 は染付皿の角向付と推測される。7 は染付皿。口径が 14.0 cm を個体で、見込みに五弁花文様のほか、口縁部にも梅モチーフにしたと推測される文様を加える。8・9 は唐津焼。ともに外面下



第67図 平・断面図(S=1/100)



第68図 出土遺物実測図

位は露胎である。8の口径は10.0 cmを測る。10は備前播鉢である。内面には斜位に播目が見える。11は丹波播鉢。内面の播目は一本引きによる。18世紀中頃の所産である。12は丸瓦である。凸面は、丸瓦部が縦ナデ、玉縁部が横ナデを施す。凹面には布目のほか、波状の吊り紐痕が見える。

6層出土遺物 13は古備前。口縁端部に玉縁を形成する甕で、15世紀代の所産である。混入遺物の可能性を考えられる。

7層出土遺物 14は平瓦である。狭端面、側面はケズリを、狭端凹縁には横ケズリによる面取りを施す。凸側縁にはバリが残る。2次焼成を受けている。

(3)まとめ：今回の調査では、T.P.+7.4～7.5mで確認した7層整地層が特筆される。本層内には、1577年の石山合戦時に形成された焼土塊が多量に混在していた。したがって本層は、この時期以後に造成された整地層であり、石山合戦後の久宝寺寺内町の再興に伴う整地層と考えられる。特に、本層上面で検出したSD 1は、ほぼ東西に伸びることが予測されることから、再興後の町割りを解明する上で注目される。

#### 【参考文献】

- ・櫻井敏夫・大草一憲1988『寺内町の基本計画に関する研究—久宝寺寺内町と八尾寺内町を中心として—』八尾市教育委員会
- ・岡田清一2004『久宝寺寺内町遺跡 第1次調査 (財)八尾市文化財調査研究会報告80』(財)八尾市文化財調査研究会

## 11) 郡川遺跡(2009-477)の調査

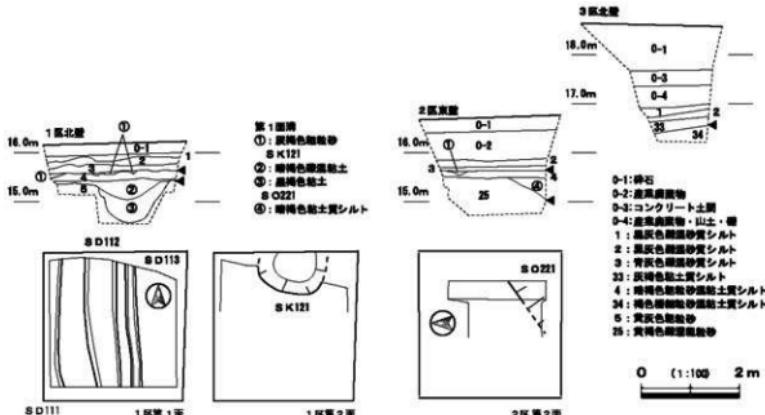
(1) 調査地：郡川3丁目82-1の一部（第34図参照）

(2) 調査概要：平面規模約 $3.0 \times 3.0$ m、面積約 $9.0 \text{ m}^2$ 3ヶ所（北から1～3区 総面積約 $27.0 \text{ m}^2$ ）について、1区は現地表(T.P.+16.2m前後)下1.7m前後、2区は現地表(T.P.+16.7m前後)下2.0m前後、3区は現地表(T.P.+18.7m前後)下2.4m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10D37（調査地南東地点：T.P.+16.950m）である。

【地層】調査地の標高は、南東(T.P.+19.0m)が高く北西(T.P.+16.0m)が低い。1区：0層直下に1層旧作土層(T.P.+16.0m)がある。以下2・3層も作土層である。4層(T.P.+15.5m)は、当地の耕地ベース（耕盤）となるもので、本層上面を第1面とした。層厚は0.2m前後で、弥生後期以降の土器を含む。5層(T.P.+15.3～15.4m)は弥生時代後期の遺構ベースで、本層上面を第2面とした。層厚は0.8m程度まで確認したが、下部ほど砂粒は粗くなる。2区：0層直下に2層以下があり、4層上面の標高は15.6m前後で1区よりやや高い。5層に対応する25層上面の標高は15.5m前後、層厚0.9m程度まで確認したが、1区同様下部ほど粒径が大きくなる。3区：近年の造成・盛土が顕著で、現地表下1.5～1.6mまで及ぶ。その直下に1層旧作土層があり、上面の標高は17.0m前後で1区との比高差は1.0m程度である。以下には、1・2区の対応層があり、第1面にあたる34層上面の標高は16.4～16.6mで、1・2区より1.0m以上高い。

【検出遺構】1区：4層上面で溝SD111～113、5層上面で土坑SK121を検出した。SD111～113はいずれも南北方向に伸び、幅0.25m以上、深さ0.1m前後を測る。SD112は数本の溝が重複していると思われる。埋土は①灰褐色粗粒砂で、弥生土器や土師器・須恵器の細片を含む。奈良時代以降の動溝であろう。1区北端検出のSK121は、径1.5m・深さ0.9mを測る。埋土は②暗褐色膠泥粘土・③黒褐色粘土からなり、弥生時代後期の土器（1～16）、砥石や礫（17～19）が多量に出土した。2区：52層上面で落込みSO221を検出した。SO221は2区南東端で検出したもので、北東～南西に肩をもち、南東へ向かって落ちる。深さは0.5mまで確認した。埋土は④暗褐色粘土質シルト、遺物は出土していない。

【出土遺物】1は頸部に刻み目を持つ突帯を貼付ける壺である。2は口縁部を下方に拡張し、端面に3条の凹線が巡るもので、壺または器台の可能性がある。3は小型の有縦高杯、4～6は柱状部から据



第69図 平・断面図 (S = 1/100)

表2 出土遺物一覧

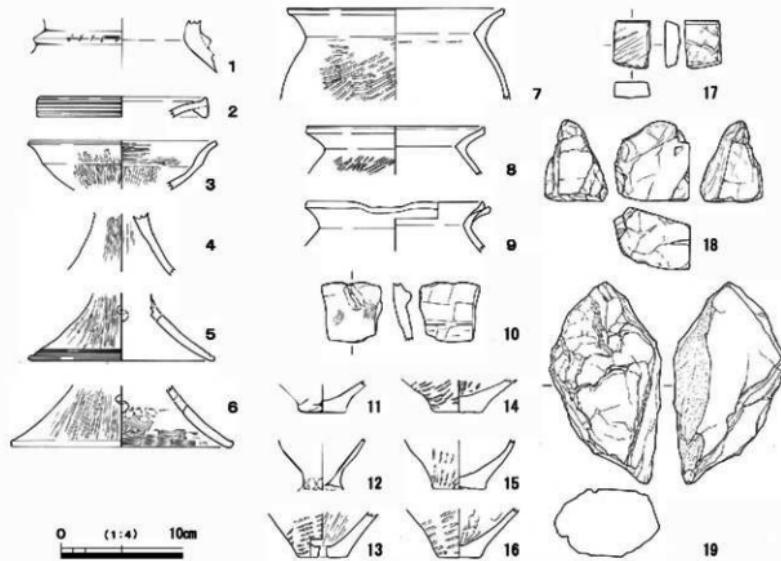
番号	器種・部位	法量(cm)
1	壺 頸部	径 12.6
2	壺・器台 口縁部	口径 13.5
3	高杯 口	径 15.2
4	高杯 被部基部	径 4.3
5	高杯 被部被	径 15.0
6	高杯 被部被	径 17.8
7	甌 口縁部	口径 17.6
8	甌 口縁部	口径 14.4
9	甌 口縁部	口径 14.3
10	不明 つまみ	5.0×4.9×0.9
11	壺・鉢 底部	径 4.0
12	鉢 底部	径 3.4
13	甌 底部	径 4.0
14	甌 底部	径 3.8
15	壺・甌 底部	径 4.0
16	甌 底部	径 3.4
17	底石	3.9×3.0×1.3
18	礫	6.1×6.5×5.1
19	礫	5.5×8.2×5.5

部へならかに続く高杯脚部で、5の据端部には凹線が巡り、6とともに円孔を持つ。7はやや大型、8・9は中型の甌である。いずれも体部から屈曲して外反する口縁部に至る。端部はつまみ上げられ、面をなす。9には注口がある。10はつまみ部分の破片で、外面に小型の突起(2.2×1.3×0.6cm)が貼付けられる。壺の肩付近と考えられる。11は壺または鉢底部と考えられ、黒斑を有する。12は小型鉢底部で、上げ底状の底端部は指ナデでつまみ出される。13は底部有孔土器、底面中央に焼成前の孔(径 0.8cm)を穿つ。14は甌底部、張りの強い体部に至る。15は壺・鉢の可能性があり、タタキをナデで消すもので底部裏面に木葉痕が見られる。16は張りの弱い体部に至る甌底部である。17は現状で長方形を呈する砂岩製の砥石で、両端は欠損している。18・19は閃綠岩かと考えられる礫で、数か所に平坦面がある。用途不明であるが、他にも数点同様の礫が出土していることから、遺構内の石組み等の施設に伴うものと考えられる。

(3)まとめ：今回の調査では、1・2区で弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。調査地の南に隣接する郡川遺跡第6・7次調査でも、弥生時代後期～鎌倉時代に至る遺構・遺物が検出されている。なかでも、第7次調査では弥生時代後期中葉の土器廃棄溝が検出されており、SK121との関連が考えられる。

## 【参考文献】

- ・成海佳子・西村公助・木村健明2008「郡川遺跡 I 第6次調査 II 第7次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告125』(財)八尾市文化財調査研究会



第70図 出土遺物実測図

## 12) 郡川遺跡(2010-17)の調査

(1) 調査地：郡川3丁目5番、6番の一部（第34図参照）

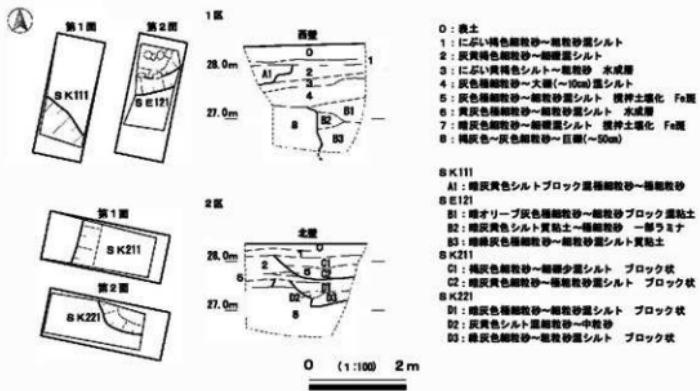
(2) 調査概要：平面規模約 $1.0 \times 2.5m$ 、面積約 $2.5 m^2$  2ヶ所(西から1・2区 総面積約 $5.0 m^2$ )について、現地表(T.P.+28.4~28.5m)下 $2.0m$ 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3D266(調査地南東部:T.P.+30.112m)である。

【地層】0層は表土。以下現地表下 $2.0m$ 前後までの $1.8m$ 間において8層の基本層序を確認した。1層(T.P.+28.1~28.2m)は整地層であろう。2層(T.P.+27.7~28.1m)は縮りの悪い層相で、水成層の可能性がある。3・4層(T.P.+27.3~27.9m)は1区で見られ、南下がりである。3層は水成層、4層は2層と同様縮りが悪く、水成層の可能性が高い。5~7層(T.P.+27.5~27.8m)は2区で見られた。5・7層は搅拌された土壤化層である。6層は水成層で、1区3層に相当するかもしれない。8層(T.P.+27.3~27.5m以下)は土石流堆積で、弥生土器や古墳時代後期頃の須恵器・土師器を含む。

### 【検出構造・出土遺物】

第1面(2層上面:T.P.+28.1m)

1区で土坑1基(S K111)、2区で土坑1基(S E121)を検出した。S K111は北西-南東方向の肩から南西に落ち込むもので、深さ40cm以上を測る。埋土はブロック状の單一層である。奈良-平安時代頃の土師器の他、時期不明の土師器・須恵器片が出土した。1は土師器碗で、内面には二段に螺旋状暗文を施す。奈良時代末に比定されよう。S K111は南北方向の肩から東に落ち込み、東西1.5m以上、深さ約50cmを測る。埋土はブロック状の2層からなる。古墳時代後期末の須恵器杯身片の他、時期不明の土師

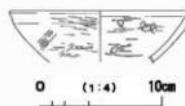


第71図 平断面図(S = 1/100)

器・須恵器片が出土した。

第2面(7・8層上面:T.P.+27.4~27.6m)

1区で井戸1基(S E121)、2区で土坑1基(S K221)を検出した。S E121は円形と思われる掘方の南部を検出したもので、深さは約1.1mまでを確認した。肩付近の一部に20cm程度の石が遺存する他、底部にも同



第72図 出土遺物実測図

様の石が多く落ち込んでおり、石組み井戸であった可能性がある。埋土は3層を確認し、上層はブロック状、中・下層は自然堆積である。弥生土器・庄内式土器・土師器・須恵器片が出土した。類例から見て石組み井戸の時期は中世末～近世と思われるが、詳細は不明である。SK221は円形と思われる掘方の南西部を検出した。深さ約50cmを測り、埋土は3層からなる。弥生時代後期の土器片が出土した。ブロック層南北方向の肩から東に落ち込み、東西1.5m以上、深さ約50cmを測る。埋土はブロック状の2層からなる。古墳時代後期末の須恵器片その他、時期不明の土師器・須恵器片が出土した。

(3)まとめ：調査では2面の遺構面を確認し、井戸・土坑を検出した。しかし遺物やその出土状況からは遺構の帰属時期を断定できなかった。遺構や地層内出土土器からみて、古墳時代後期～奈良時代、中世～近世という時期が想定できるが、周辺の調査により明らかにしてゆく必要がある。

#### 【参考文献】

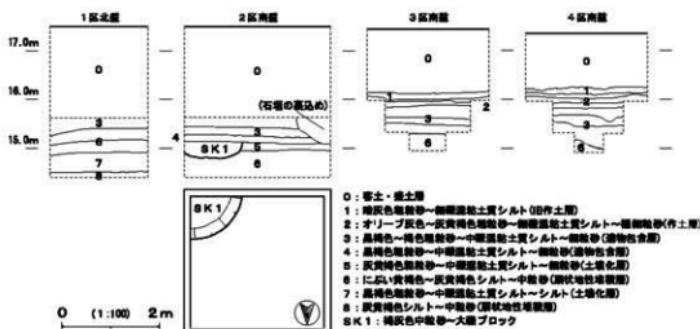
- 著者1997「6. 郡川遺跡(96-275)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告書I』八尾市文化庁調査報告36 平成8年度国庫補助事業』八尾市教育委員会

### 13) 郡川遺跡(2010-35)の調査

#### (1) 調査地：教興寺4丁目8番、9番(第34図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0$ m、面積約 $4.0 \text{ m}^2$ 1ヶ所、約 $3.0 \times 3.0$ m、面積約 $9.0 \text{ m}^2$ 1ヶ所、約 $2.5 \times 2.5$ m、面積約 $6.25 \text{ m}^2$ 2ヶ所の計4ヶ所(総面積約 $25.5 \text{ m}^2$ )について、現地表(T.P.+17.4~17.5m前後)下2.5~3.0mまでを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1A219(調査地北東交差点: T.P.+17.338m)である。

【地層】現地表下1.1~1.9m前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下2.5~3.0m前後までの1.1~1.4m間ににおいて8層の基本層序を確認した。1層は3・4区で確認した旧作土層(T.P.+16.2m)である。2層は3・4区で確認した近世頃の作土層と推測される。3層は各調査区で確認した弥生土器や古式土師器、土師器が混在する遺物包含層(T.P.+15.4~15.9m)である。層厚は0.3~0.8mを測る。3層に細分できた。4層は2区で確認した弥生時代後期の遺物包含層である。5層は2区で確認した土壤化層で、上面において土坑を1基(SK1)検出した。6層は各調査区で確認した扇状地性堆積層であ



第73図 平・断面図 (S = 1/100)

る。7層は1区で確認した土壌化層(T.P.+14.9m)である。層厚は0.3mを測る。8層は1区で確認した砂礫優勢の扇状地性堆積層(T.P.+14.5m以下)である。

【検出遺構・出土遺物】2区の5層上面で土坑を1基(SK1)検出した。SK1は、東と南が調査区外に広がるため、全容は不明であるが、ほ

ぼ円形の掘形を呈していたと推測される。東西長、南北長ともに1.0m以上の規模を有し、深さは約0.2mである。埋土は、中粒砂→大礫のブロック土が充填されており、弥生土器細片が少量混在していた。図化は不可。帰属時期は、弥生時代後期と考えられる。

また、2区4層からは弥生時代後期半に帰属する土器が出土した。3点を図化した。1は広口壺。内、外面ともに横ナデで仕上げる。口径は11.4cmを測る。2は甕。外面にはタタキが施される。口縁部はタタキ出しにより形成される。口径は20.7cmである。3は壺。体部中位に最大径(18.6cm)をもつ個体で、中位には焼成後の穿孔を認める。調整は外面がタタキ後板ナデ、内面が板ナデのほか摺ナデを施す。残存器高は17.2cmである。いずれも生駒山地西麓産の胎土を用いる。

(3)まとめ:今回の調査では、弥生時代後期半の4層遺物包含層を確認したほか、弥生時代後期のSK1を検出した。当該期については、2区で遺物の出土率が高いことから、調査地の南西方向に遺構が展開している可能性が高い。一方1区で確認した6層土壌化層にも注目したい。遺物の混在は皆無であったが、層厚が0.3m前後を測ることから、弥生時代後期以前の遺構が存在する可能性も否定できない。今後周辺で調査が行われる際には、注意されたい。

#### 14) 郡川遺跡(2010-328)の調査

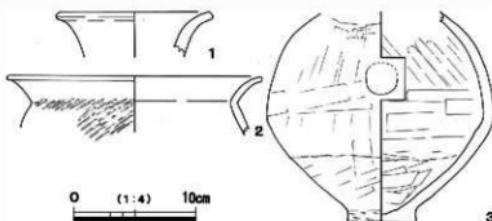
(1)調査地:教興寺七丁目56番3(第34図参照)

(2)調査概要:平面規模約2.0×1.5m、面積約3.0m<sup>2</sup>1ヶ所、2.5×2.5m、面積約6.25m<sup>2</sup>1ヶ所の計2ヶ所(総面積約9.25m<sup>2</sup>)について、現地表(T.P.+17.4m前後)下1.9m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10D40(調査地南東25m地点:T.P.+17.446m)である。

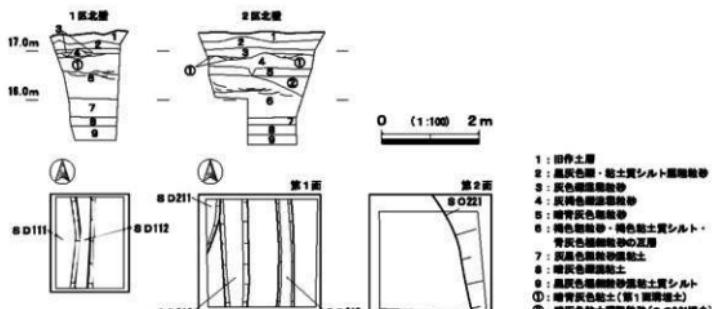
【地層】1層は旧作土層、2・3層は作土層で、4層がそれらの床土層となる。5・6層は河川堆積層である。7層以下は比較的綺麗の良い土質で、当遺跡の生活層に対応するものであろう。

【検出遺構・出土遺物】4層上面では、1区で2条(SK111・112)、2区で3条(SK211~213)の溝状遺構(鴨池)を検出した。幅0.3m・深さ0.1m程度の規模で、いずれも南北に伸びる。内部からは、近世の陶磁器片が少量出土した。6層上面では、2区で落込み1ヶ所(SK221)を検出したが、上層の5層が1区では堆積していないことから、5層を含めての遺構とも考えられる。また、6層も含めた河川の可能性もある。5層からは、平安時代の土師器羽釜片が出土している。8層からは古墳時代の土師器・須恵器が極少量出土したほか、3層から古墳時代中期頃の須恵器杯蓋が出土している。図化は不可。

(3)まとめ:今回の調査では、現地表下0.5m前後で近世の耕作痕を検出したが、それ以下1.0m前後は埋没河川の堆積状況が確認できた。さらに、現地表から1.5m前後では、古墳時代の遺物包含層の存在



第74図 出土遺物実測図



第75図 平・断面図 ( $S = 1/100$ )

を確認することができ、周辺の既往調査の結果を裏付けることができた。

【参考文献】

- ・西村公助・成海性子2008「郡川遺跡第6次・第7次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告125』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・西村公助 2008「郡川遺跡第8次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告123』(財)八尾市文化財調査研究会

## 15) 小阪合遺跡(2010-12)の調査

(1) 調査地：山本町南8丁目110番(第35図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ 、面積約 $4.0\text{m}^2$  1ヶ所について、現地表(T.P.+10.0m)下2.1m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10D66(調査地北部:T.P.+9.579m)である。

【地層】0層は客土・盛土層。以下現地表下2.1m前後までの1.0m間ににおいて7層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+8.7~8.8m)である。2・3層(T.P.+8.5~8.7m)はグライ化し攪拌された作土層で、時期は近世であろう。4・5層(T.P.+8.2~8.5m)はFe斑を含み攪拌された作土層で、時期は中世頃であろう。6層(T.P.+8.0~8.2m)・7層(T.P.+8.0m以下)はFe斑・Mn斑を含む粘土質シルト・ヘシルトで、攪拌され土壤化する。

【検出遺構・出土遺物】6層から時期不明の土師器片が数点出土した。細片のため図化は不可。

(3)まとめ：調査では遺物包含層(6層)を確認した。土器から時期は断定できないが、周辺の調査からみて古墳時代初頭～前期の遺物包含層と考えられる。7層上面(T.P.+8.0m)が当該期の遺構面となる可能性が推測される。

### 【参考文献】

・坪田真一-2009「I 小阪合遺跡(第42次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告126』(財)八尾市文化財調査研究会

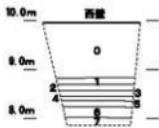
## 16) 小阪合遺跡(2010-232)の調査

(1) 調査地：青山町四丁目156(第35図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $3.0 \times 3.0\text{m}$ 、面積約 $9.0\text{m}^2$  3ヶ所(総面積約 $27.0\text{m}^2$ )について、現地表(T.P.+9.3~9.6m前後)下2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1057A(調査地北西南交差点:T.P.+9.256m)である。

【地層】現地表下0.7~1.6m前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下2.5m前後までの1.1~1.8m間ににおいて12層の基本層序を確認した。1層は、1区で確認した旧作土層(T.P.+8.4m)である。2~4層は中世以降の作土層である。5層は土壤化層(T.P.+7.9~8.1m)である。上面が1面に相当する。6層は、2・3区で確認した土壤化層(T.P.+8.0m)である。上面が2面に相当する。7~10層は土壤化層である。11層は河川堆積層(T.P.+7.6~7.7m)である。上面が3面に相当する。12層は、2区で確認した湿地性堆積層である。

【検出遺構】1面(T.P.+7.9~8.1m): 2・3区の5層上面において、中世以降の土坑を2基(201土坑・202土坑)、鋤溝を1条(301鋤溝)検出した。201土坑は東西に主軸を有するもので、検出規模は東西1.2m以上、南北0.9mである。深さは約10cmで、埋土はブロック土の単層である。202土坑は、概ね方形の掘形を呈した可能性が高い。検出規模は一边が1.0m以上である。深さは約10cmで、埋土はブロック土の単層である。301鋤溝は4層作土層に帰属する鋤溝である。幅は約0.9m、長さは3.5m以上の規模を有する。深さは約5.0cmを測る。各遺構からは、中世頃の土師器や須恵器が出土したが、いずれも細片のため図化は不可であった。

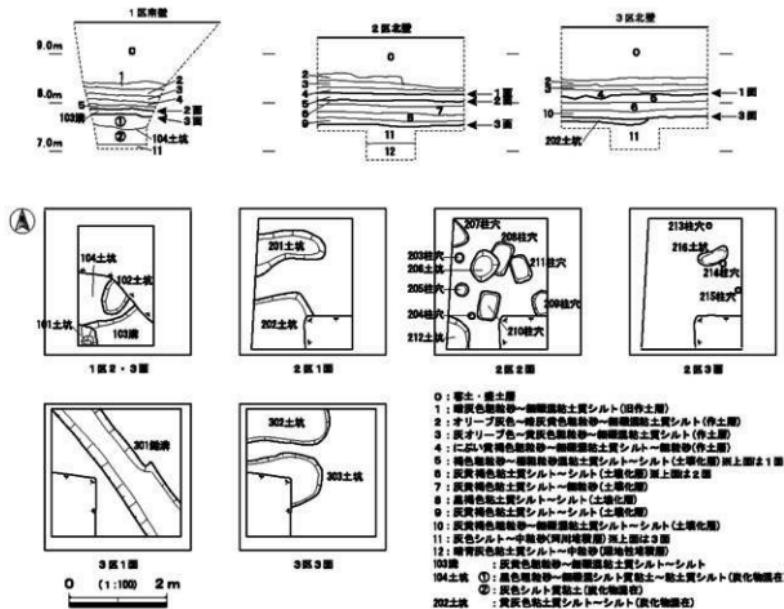


第76図 断面図(S=1/100)

- 0: 客土・盛土層
- 1: 塗覆色褐色砂質粘土質シルト(旧作土層)
- 2: 緑灰褐色粘土・綠褐色砂質粘土質シルト(作土層)
- 3: オリーブ灰色粘土・綠褐色砂質粘土質シルト(作土層)
- 4: 深オリーブ色粘土・綠褐色砂質粘土質シルト Fe斑(作土層)
- 5: 灰色粘土・綠褐色砂質シルト・鉄斑土 Fe斑(作土層)
- 6: 緑灰褐色粘土質シルト・ヘシルト Fe斑(作土層)
- 7: 黄灰セシルト・黃褐色粘土質シルト Fe斑(作土層)

2面(T.P.+8.0m)：1・2区の6層上面において、古代と推測される土坑を4基(101土坑・102土坑・206土坑・212土坑)、溝を1条(103溝)、柱穴を8個(203～205柱穴・207～211柱穴)検出した。101土坑は東西0.4m以上、南北0.4m以上の不定形な掘形である。深さは約20cmで、埋土はブロック土の単層である。102土坑は南南西～北北東に主軸を有する梢円形の掘形(長軸約0.6m以上 短軸約0.5m)であったと推測される。深さは約20cmで、埋土はブロック土の単層である。206土坑は不整正方形(一边約0.5m)の掘形である。深さは約10cm、埋土はブロック土の単層で、投棄されたと思われる土師器が出土した。図化は不可。212土坑は東西0.4m以上、南北0.7m以上の不定形な掘形を呈し、深さは約20cmを測る。埋土はブロック土の単層。103溝は、概ね南西～北東方向に伸びることが考えられる。検出規模は、幅が0.7m以上、長さが1.5m以上、深さは約20cmを測る。埋土はブロック土の単層。柱穴は、掘形が円形(径約10～20cm)を呈するもの(203～205柱穴)と、隅丸方形(長軸約60cm 短軸約40cm)を呈するもの(207～211柱穴)に分類できた。深さは10cm前後で、埋土はブロック土の単層であった。

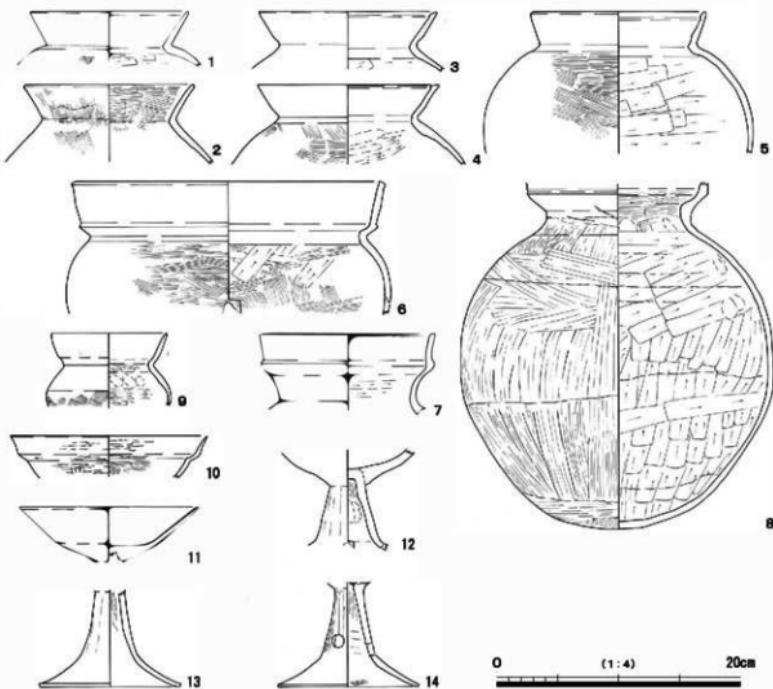
3面(T.P.+7.6～7.7m)：1～3区の11層上面において、古墳時代前期の土坑を4基(104土坑・216土坑・302・303土坑)、柱穴を3個(213～215柱穴)検出した。104土坑は、北側が擾乱に切られるほか、西側と南側が調査区外に広がるため、全容は不明。検出規模は東西1.5m以上、南北1.5m以上、深さ約60cmを測る。埋土は炭化物の混在する黒色を呈した2層のブロック土から成る。この内②層からは完形の布留式甕を含む古式土師器が多く出土した。216土坑は、南南西～北北東に主軸を有する梢円形の掘



第77図 平・断面図(S=1/100)

形(長軸約0.6m 短軸約0.3m)を呈する。深さは約10cmで、埋土はブロック土の単層である。南北に並ぶ302・303土坑は、概ね東西に主軸を有する梢円形の掘形(東西長1.5m以上 南北長約1.1m)が推測される。深さは約10cmで、埋土はブロック土の単層である。この内302土坑からは、弥生時代後期にまで遡る可能性が考えられる土器の細片が出土した(図化は不可)。213~215柱穴は、掘形が円形(径約0.1m)を呈するもので、深さは約10cmを測る。埋土はブロック土の単層であった。出土遺物はなし。

【検出遺構】104 土坑出土遺物 1~14は古式土師器。1~5は甌。いずれも口縁端部は内厚し、頸部内面はケズリ後横ナデにより鈍角を成す個体群である。調整は、概ね口縁部が横ナデ、体部外面がハケナデ、内面がケズリである。2については、口縁部内面が横位ハケナデ、体部内面がナデとやや異なる。口径は13~14cmである。6~8は甌と考えられる。6は口径25.0cmを測る個体で、鉢の可能性もある。体部中に焼成後の穿孔が認められる。7・8は複合口縁甌。7は口径が14.4cmを測る個体で、口縁部内面には横位ケズリが施される。8は体部が球形を呈する個体である。口縁部外面は横ナデ、内面が横位ミガキを施すほか、体部外面はハケナデ、内面はケズリが行われる。口縁部と口縁部の変化点には沈線が1条巡る。6~8は山陰地域からの搬入品の可能性が高い。9は小型丸底土器である。口縁部は内湾気味に伸び、口径は9.4cmを測る。体部は偏球形を呈するものと思われる。10は小型有段鉢。口径は16.2cmである。内外面ともに横位ミガキを密に施す。11~14は高杯である。11・12は有稜高杯



第78図 出土遺物実測図

である。いずれも稜の退化が著しい。11の口径は14.6cmである。13・14は柱状部から据部へと緩やかな曲線を描きながら移行する個体である。柱状部外表面の調整は板ナデである。14の柱状部下方には3方から穿った円形透孔が存在する。これらの遺物の帰属年代は古墳時代前期(布留式期中相)と考えられる。

(3)まとめ：古墳時代前期については、104土坑が特筆される。遺構の性格や規模は不明であるが、完形の甕をはじめとする多くの古式土器が出土しており、本調査地一帯が当該期の居住域に位置した可能性が高くなかった。今回の調査地の東隣に位置するKS96-35調査地では、堅穴住居や掘立柱建物が検出されており、居住域の広がりを知る上で注目すべき成果と言える。

古代については、KS96-35調査地で居住域に伴う井戸や土坑が検出されており、今回2区において柱穴が検出されたことから、居住域がさらに西に展開していることが明らかになった。

中世に関しては、古代同様、KS96-35調査地において、居住域に伴う井戸や土坑が検出されている。今回の調査では2区で当該期の遺構を検出しており、居住域が西に広がっている可能性が高くなかった。

#### 【参考文献】

- 原田昌則2008「III 小阪合遺跡第35次調査(KS96-35)」『小阪合遺跡』(財)八尾市文化財調査研究会報告116』(財)八尾市文化財調査研究会

### 17) 小阪合遺跡(2010-105)の調査

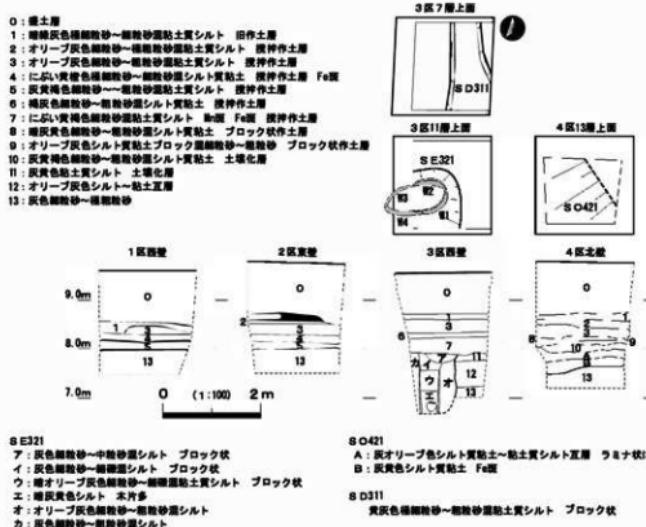
(1)調査地：青山町四丁目253、255、256(第35回参照)

(2)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0m<sup>2</sup>4ヶ所(北西から1～4区 総面積約16.0m<sup>2</sup>)について、現地表(T.P.+9.6～9.8m)下2.1～2.6m前後までを調査した。なお3区では、検出した井戸枠取り上げのため西側を拡張した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10D77(調査地東部:T.P.+9.637m)である。

【地層】0層は客土・盛土層。以下現地表下2.6m前後までの1.7m間において13層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+8.4～8.7m)。2～7層(T.P.+7.9～8.6m)は攪拌された作土層で、時期は中世～近世であろう。3区7層上面が第1面である。8・9層(T.P.+8.1～8.3m)は淘汰不良のプロック状で、作土層考えられる。時期は不明。3・4区の10・11層(T.P.+7.8～8.1m)は土壤化層で、上面が第2面である。4区10層はS O421埋土の可能性もある。12層は3区で見られた湿地性堆積層である。13層は河川堆積層で、1・2区ではT.P.+8.0m以下、3・4区ではT.P.+7.2～7.6m以下で見られた。【検出遺構】第1面～3区7層上面(T.P.+8.2m)で南北方向の溝1条(S D311)を検出した。幅60～90cm・深さ約20cmを測る。耕作関連の溝であろう。

第2面～3区11層上面(T.P.+7.9m)で井戸1基(S E321)、4区13層上面(T.P.+7.0m)で落ち込み1基(S O421)を検出した。S E321は縦板組井戸で、検出面からの深さは約1.2mを測る。縦板は丸木の辺材4枚で構成されており、平面形は東西に長い梢円形に組まれている。掘方は検出部分の状況から隅丸方形を呈するものと考えられる。枠内埋土は3層からなり、最下層(エ層)からは東海系甕(1)が正位で出土したほか、その下位からは布留式傾向甕(2)や庄内式甕の細片が出土した。S O421は4区全域に及び、調査区外の北東部に肩を有すると思われ、北東から南西方向に落ち込んでいる。深さ50cm以上を測り、埋土は自然堆積層である2層からなる。古墳時代前期(布留式期中相)の土器が多く出土した(3～12)。

【出土遺物】S E321-1はS字状口縁の台付甕で、口径11.6cm・体部最大径20.0cmを測る。外面調整はハケで、体部は方向を変えて4段に施し、肩部には水平方向の平行タタキが残る。口縁端部内面にもハケを施している。台部は欠損しているが、打ち欠きの可能性が考えられよう。2は外面ハケ調整の布



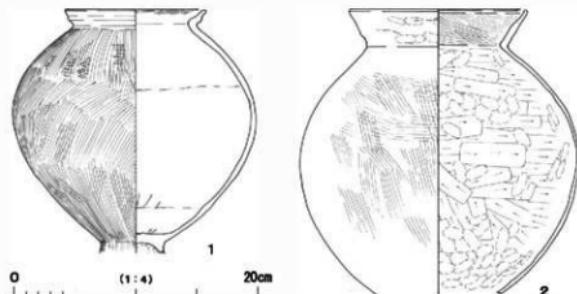
第79図 平・断面図 ( $S = 1/100$ )

留式傾向壺で、口縁端部は内側に小さく肥厚する。1・2共に体部外表面が煤けている。これらは古墳時代前期(布留式古相)に比定される。縱板(W1-W4)は、高さ94~104cm、幅42~53cm、厚さ4~6cmを測る。下端の切断においては、W2が外面から、W4は内外面からの手斧等による打撃痕が明瞭に認められる。W1には枘穴、W1・W2・W4内面の片側の縁辺には、下端から約30cmの位置に台形の刺り込みが見られる。これらは縱板は転用材と考えられるが、船であった可能性が高い。

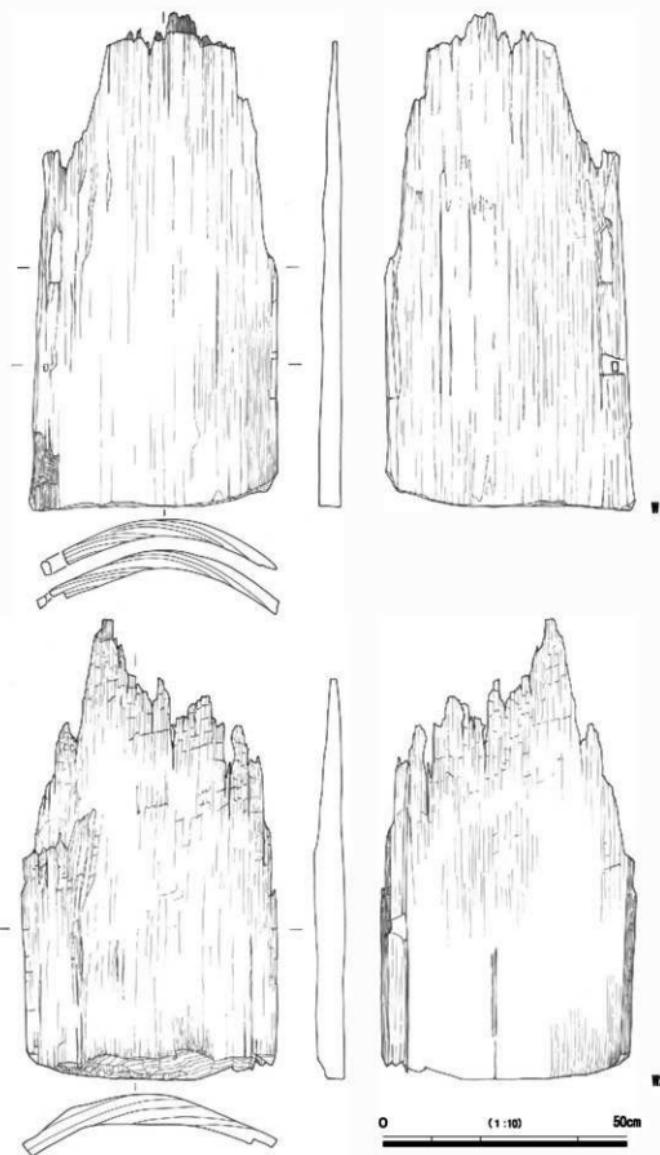
S O421-3~9は壺である。3~5は外面ハケ調整の布留式傾向壺で、内面はヘラケズリであるが、4は上位にハケを施している。6はやや扁平な底体部で、外面はナデ調整である。7・8は形態的に四国東部産と考えられる。

9はミニチュアの東海系壺で、口径6.0cmを測る。外面調整は粗いハケである。10は広口壺である。11はヘラミガキ調整の精製の小形有段鉢。12は山陰系の複合口縁大形鉢である。体部外表面ハケ調整で、底部外表面は煤けている。

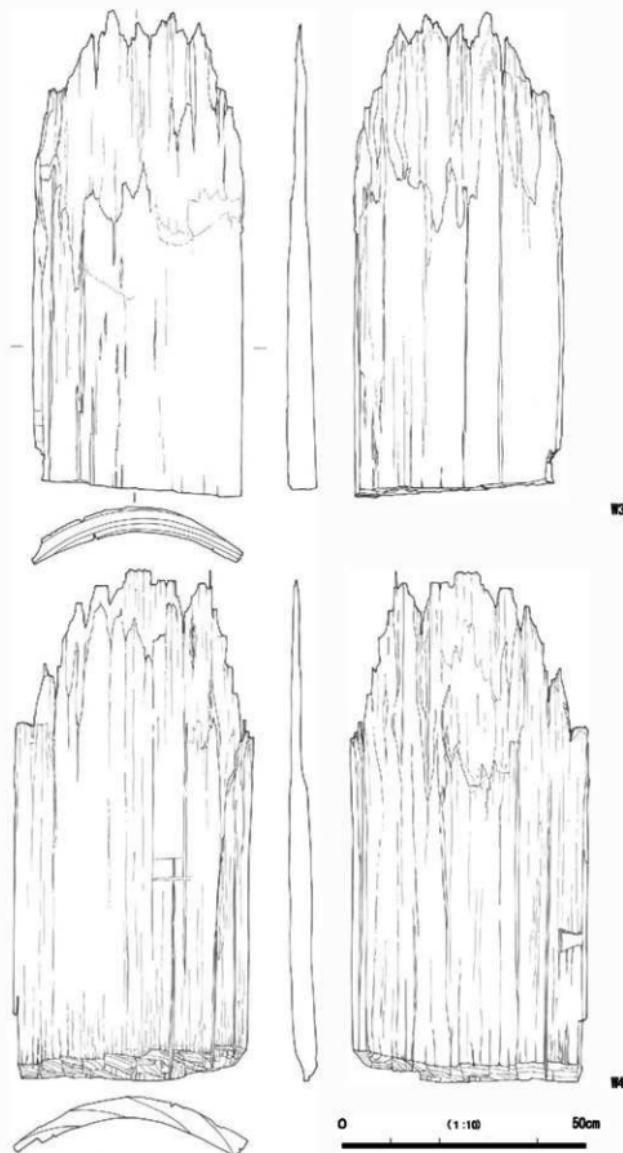
(3)まとめ：東の3・4区では周辺の調



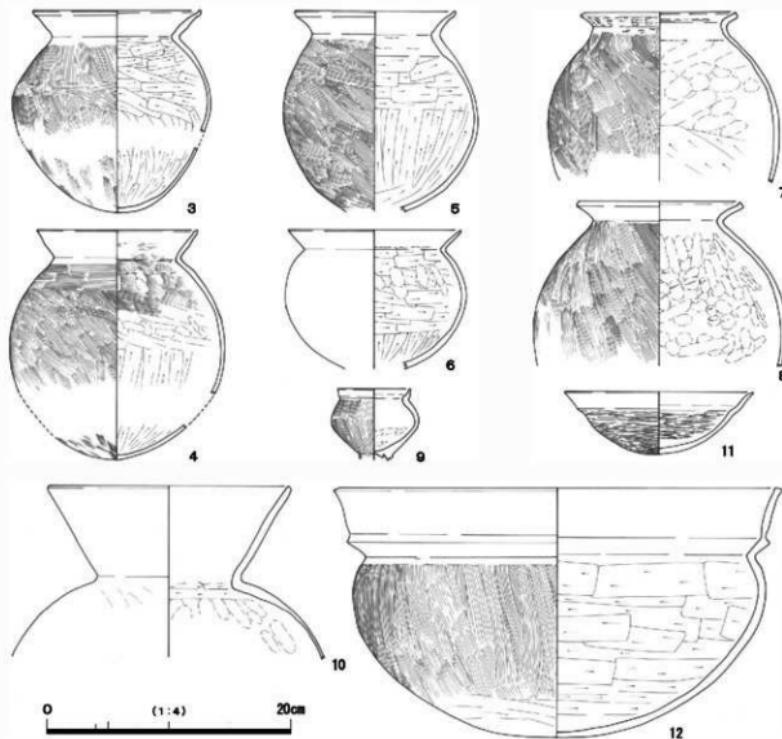
第80図 出土遺物実測図



第81圖 出土遺物實測圖



第82図 出土遺物実測図



第83図 出土遺物実測図

査地と同様、古墳時代前期(布留式期古相)の造構が検出された。出土遺物を見ると他地域からの搬入品の占める割合が高い。S E321からは河内地域では類例の少ない東海系壺が出土し、またS O421からも四国系壺の他、小型の東海系壺が出土しており特筆される。西の1・2区では遺物も見られなかったことから、当該期の集落域から外れている可能性がある。

【参考文献】

- ・高萩千秋1987「第4章 小阪台遺跡第3次調査」『小阪台遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告11』(財)八尾市文化財調査研究会

## 18) 渋川廃寺(2010-95)の調査

(1) 調査地：春日町1丁目8番2（第33回参考）

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0$ m、面積約 $4.0 \text{ m}^2$ 1ヶ所、約 $2.5 \times 2.5$ m、面積約 $6.25 \text{ m}^2$ 2ヶ所の、計3ヶ所（総面積約 $16.5 \text{ m}^2$ ）について、現地表（T.P.+9.75m前後）下 $1.5 \sim 2.5$ m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点 2014 A（調査地北西：T.P.+9.747m）である。

【地層】現地表下 $0.8$ m前後までは、客土・盛土層（O層）。以下現地表下 $2.5$ m前後までの $1.7$ m間ににおいて5層の基本層序を確認した。1層は旧作土層（T.P.+8.8~8.9m）である。2層は近世～近代の作土層である。3層は中世頃の作土層の可能性が高い。瓦片が少量混在する。4層は古代～中世の遺物を含む土壤化層（T.P.+8.4m前後）で、さらに4層に細分できた。5層は河川堆積層である。

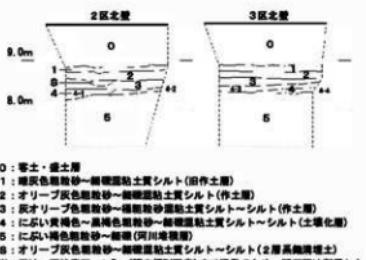
【検出遺構・出土遺物】検出遺構はなし。出

土遺物は、1～3層内から少量の瓦細片のほか、4層からは古代～中世の土師器や須恵器、黒色土器、瓦器、瓦の細片が出土した。この内図化できたのは4層出土の3点である。1は須恵器の杯蓋で、穂は形骸化が進んでいる。口径は $14.0 \text{ cm}$ である。6世紀前半の所産である。2は黒色土器（内黒）の碗と推測される。高台は断面三角形を呈し、高い。帰属年代は9世紀後半と推測される。3は瓦器の皿。内、外側ともにミガキを密に施すほか、見込みには斜格子状に暗文を加える。口径は $9.4 \text{ cm}$ を測る。11世紀代の所産と推測される。

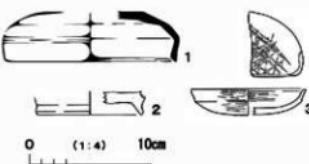
(3)まとめ：今回の調査地は、渋川廃寺中心伽藍の南東付近に位置することから、寺院関連遺構の検出が期待されたが、結果は上記の通りであった。4層土壤化層に含まれる遺物が、古代～中世に帰属することから、4層下面が渋川廃寺存続時期の対応面になることが予測される。しかしながら、4層に包含される遺物が少ないと、中世以降の作土層である1～3層にも、混在する遺物が少ないとから、渋川廃寺の伽藍は、今回の調査地までは広がらない可能性が高くなった。

### 【参考文献】

- 坪田真一・金根満夫2004『渋川廃寺 第2次調査 第3次調査』（財）八尾市文化財調査研究会報告79』（財）八尾市文化財調査研究会



第84図 断面図 ( $S = 1/100$ )



第85図 出土遺物実測図

## 19) 成法寺遺跡(2010-65)の調査

(1) 調査地: 高美町1丁目  
10-2 (第36図参照)

(2) 調査概要: 平面規模約3.0×3.0m、面積約18.0m<sup>2</sup>  
2ヶ所(西から1・2区)について、現地表(t.P.+8.7m前後)下3.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1049  
A(調査地北東に位置する青山町交差点北西隅:t.P.+8.461m)である。

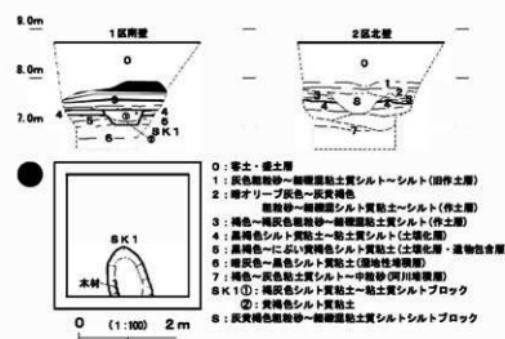
【地層】現地表下0.8m前後までは、客土・盛土層(0層)である。以下現地表下3.0m

前後までの2.2m間において7層の基本層序を確認した。1層は2区で確認した旧作土層(t.P.+7.8~7.9m)である。2層は近世以降の作土層の可能性が高い。3層は中世以降の作土層で、古式土器や土師器、須恵器の細片が混在する。4層は酸化マンガン斑の沈着が顕著な土壤化層である。1区では古墳時代中期末頃に帰属するSK1を検出した。5層は1区確認の古式土器包含層(t.P.+7.0~2.2m)である。6層は1区に存在する湿地性堆積層である。7層は2区で確認した河川堆積層である。

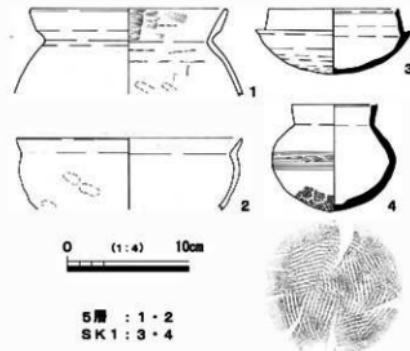
【検出遺構】1区の4層上面においてSK1を検出した。南側が調査区外に至るため、全容は不明であるが、概ね南北に主軸を有する楕円形(長軸:1.0m以上 短軸:約0.9m)を呈していたと推測される。深さは約0.3mで、埋土は2層(上から①・②層)に区分できた。この内①層からは完形の須恵器壺が出土した。遺構の帰属時期は古墳時代中期末と推測される。なお、本遺構からは、掘形の長軸に並行するように木材が出土した。木材は、板枠などの構造物の残片の可能性が考えられる。

【出土遺物】5層出土遺物 1・2は古式土器である。1は壺。口縁部は直線的に上外方に開き、端部が丸く終息する個体である。頸部内面はナデにより屈曲が鈍い。2は復元口径が約18cmを測る鉢である。内面には煤が付着している。両者ともに古墳時代前期新相の所産と考えられる。

SK1出土遺物 3・4は須恵器。3は杯身。底部は深く、丸みをもつ。口縁部は若干内に傾きながら立ち上がり、端部には段を形成する。体部外面の回転ヘラケズリは2/3に及ぶ。4は壺。体部中位にはカキ目が、下位には平行タタキが施される。両者ともに5世紀末の所産である。



第86図 平・断面図(S=1/100)



第87図 出土遺物実測図

(3)まとめ：今回の調査では、西に位置する1区において、古墳時代中期末の遺構(SK1)と古墳時代前期新相に比定される遺物包含層を検出することができた。この内、前者については、遺構の構築基盤層と考えられる4層が、2区にも存在することから、付近一帯に当該期の遺構群が展開している可能性が高くなった。一方後者については、2区でその広がりが認められないことから、調査地の西方に遺構群の分布を想定することができる。この場合、2区で確認された7層河川堆積層が、当該期の遺構群の東を区画していることが予測される。

#### 【参考文献】

・亀島重則1990.3『成法寺遺跡発掘調査概要・V』大阪府教育委員会

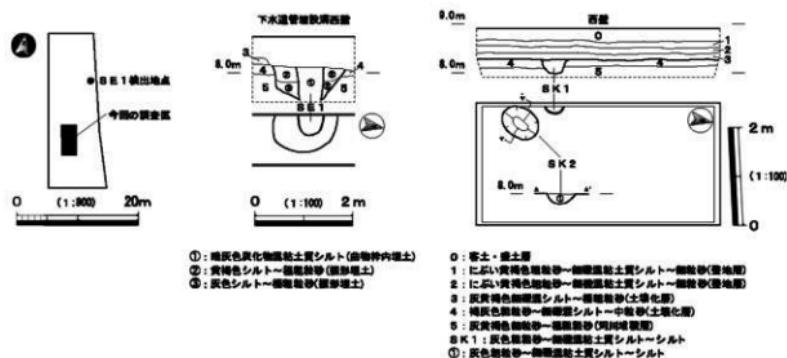
## 20) 成法寺遺跡(2010-165)の調査

### (1)調査地：南本町二丁目39番2 (第36図参照)

(2)調査概要：平面規模約 $2.5 \times 5.0$ m、面積約 $12.5 \text{ m}^2$ ヶ所について、現地表(T.P.+8.9m前後)下1.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点 3C469(調査地南西: T.P.+9.153m)である。なお、調査地東端を南北に伸びる下水道管理設溝内において、井戸を1基確認したため、この遺構のみ調査を行った。

【地層】現地表下0.2m前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下1.0m前後までの0.8m間ににおいて5層の基本層序を確認した。1・2層は、近世頃の整地層と推測される。土師器・須恵器・瓦器の細片が混在する。3・4層は中世頃の土壤化層である。この内3層には、土師器や瓦器が混在する。5層は河川堆積層である。

【検出遺構・出土遺物】5層上面で土坑を2基(SK1・2)検出したほか、下水道管理設溝内において井戸を1基(SE1)検出した。いずれも中世に帰属する遺構であり、本来の構築基盤面は4層上面と考えられる。SK1は、西部部分が調査区外に至るため全容は不明であるが、概ね円形の掘形(径約0.4m)であったと推測される。深さは、西壁断面において約0.3mを確認した。埋土はブロック土の単層である。出土遺物はなし。SK2は、SK1の南東に接する地点で検出した。南西-北東に主軸を有する



第88図 平・断面図

平面椭円形の土坑(長軸:約0.8m 短軸:約0.6m)で、検出面からの深さは約0.2mを測る。埋土はSK1と同じで、中世頃の土師器や瓦器の細片が少量出土した。図化は不可。SE1は、西部分が調査区外に至るため、全容は不明であるが、概ね平面円形の掘形(径約1.5m)であったと推測される。掘形の中央付近からは、平面円形の曲物枠(径約0.5m)が検出された。断面観察の結果、SK1同様4層上面から構築されていることを確認した。深さは約0.6mである。埋土は3層から成り、この内①層は曲物枠内埋土で、炭化物混粘土質シルトが充填されていた。②・③層は、曲物枠の裏込め土に相当し、5層を母材とする砂礫ブロック土であった。出土遺物はなし。

(3)まとめ：今回の調査では、中世に比定される遺構を検出した。本調査地の南約130mで行われた成法寺遺跡第13・15次調査では、13～15世紀の居住域を確認しているが、今回の成果により、この居住域の北限が、本調査地付近にまで広がる可能性が高くなった。

#### 【参考文献】

- ・西村公助 2006「II 成法寺遺跡第15次調査(SH05-15)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告90』(財)八尾市文化財調査研究会

## 21) 東郷遺跡(2010-76)の調査

(1) 調査地：桜ヶ丘2丁目14番（第39図参照）

(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 3.0\text{m}$ 、面積約 $7.5\text{ m}^2$  1ヶ所について、現地表(T.P.+8.0m前後)下 $2.5\text{m}$ までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点3 B412(調査地南西交差点:T.P.+7.867m)である。

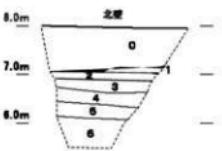
【地層】現地表下 $0.8\text{m}$ 前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下 $1.7\text{m}$ までに6層の基本層序を確認した。1層は粗粒砂～極粗粒砂が優勢な河川堆積層である。2層はグライ化が顕著なシルト質粘土で平瓦片・土師器片の2点が出土している。3・4層はシルト質粘土～粘土質シルトの層相で無遺物層である。5層はMn斑が認められるシルト質粘土である。6層は細粒砂が優勢な河川堆積層で $0.6\text{m}$ 以上を測る。層中より古墳時代中期の須恵器杯蓋の細片が出土している。

【検出構造・出土遺物】検出構造はなし。出土遺物は、2層から平瓦片・土師器碗細片が、6層から古墳時代中期の須恵器杯蓋片が少量出土した。いずれも図化はできなかった。

(3)まとめ：今回の調査地点に東接する地点では、昭和62～63年度にかけて大阪府教育委員会による楠根川改修工事に伴う東郷遺跡の発掘調査が実施されている。調査地点の東部付近がその調査の第8調査区にあたり、室町時代前後を埋没時期とする楠根川の旧河道が検出されている。今回の調査で検出した6層が大阪府の調査で検出された河川堆積層(28層)とレベル的に対応するものと推定される。したがって、2層からは北西に近接した東郷寺に関連した平瓦片および土師器碗片が出土しているが、旧河川上部の堆積が室町時代以降に想定されるため二次堆積の遊離遺物と推定される。

### 【参考文献】

・奥 和之他1963『東郷遺跡発掘調査概要・I』大阪府教育委員会



第89図 断面図 (S = 1/100)

## 22) 東郷遺跡(2010-221)の調査

(1) 調査地：光町一丁目48番・49番（第39図参照）

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0\text{m}$ 、面積約 $4.0\text{ m}^2$  1ヶ所、平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ 、面積約 $6.25\text{ m}^2$  2ヶ所の計3ヶ所(総面積約 $16.5\text{ m}^2$ )について、現地表(T.P.+7.7~7.8m)下 $1.5\sim2.5\text{m}$ までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点1038A(調査地南東交差点:T.P.+7.287m)である。

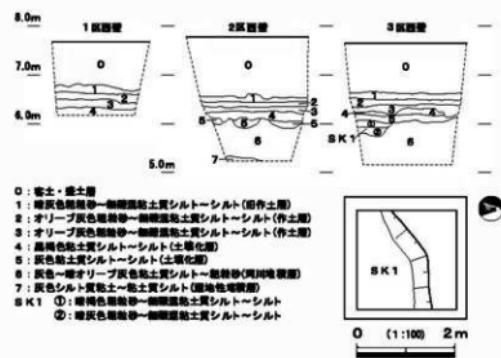
【地層】現地表下 $0.9\sim1.2\text{m}$ 前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下 $2.5\text{m}$ 前後までの $1.3\sim1.6\text{m}$ 間ににおいて7層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+6.6~6.8m)である。2・3層は中世以降の作土層の可能性が高い。土師器や瓦器の細片が混在する。4層は土師器の混在する土壤化層(T.P.+6.2~6.3m)である。5層は土壤化層(T.P.+6.1~6.2m)である。6層は河川堆積層(T.P.+6.1m)である。7層は湿地性堆積層である。

【検出構造・出土遺物】3区の6層上面において土坑を1基(SK1)検出した。西部部分と南部分、東部分が調査区外に広がるため、全容は不明である。検出規模は、東西長が $2.5\text{m}$ 以上、南北長が $1.5\text{m}$ 以上を測る。深さは $25\text{cm}$ 前後で、2層から成るブロック土が充填されていた。出土遺物は、土師器の細片

が1点(図化は不可)であった。

その他、出土遺物について  
は、1～3層作土層から土師  
器や瓦器が少量出土したほか、  
4層土壤化層からも土師器が  
少量出土したが、いずれも細  
片であり、図化はできなかつた。

(3)まとめ：今回の調査地  
周辺を見ると、東において64  
次調査が行われたほか、北で  
は第17・21・28次調査が、南  
では第14・16・40次調査が実  
施され、古墳時代前期を中心



第90図 平・断面図(S = 1/100)

とした遺構、遺物が検出されている。今回の調査では、6層河川堆積層の上位に存在する5層土壤化層が、当該期に形成された地層と考えられる。3区検出のSK1は、5層に帰属する遺構と推測されるこ<sup>ト</sup>から、周辺の調査同様、当該期の遺構が本調査地にも展開している可能性が高くなつた。特に北隣に位置する第17・21・28次調査地では、墓域の存在が確認されており、その関連性が注目される。

#### 【参考文献】

- ・坪田真一・島田裕弘・菊井佳弥・河村憲理2006「22. 球磨跡第64次調査(TG2005-64)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

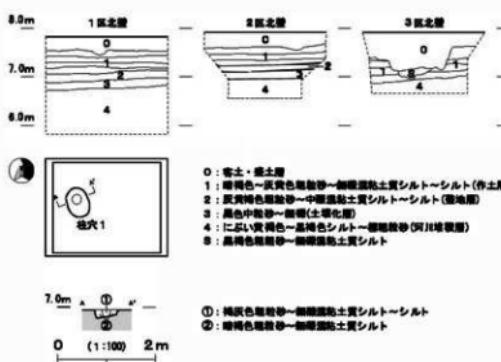
### 23) 東郷遺跡(2010-244)の調査

(1)調査地：桜ヶ丘一丁目

92番・90番2(第39図参照)

(2)調査概要：平面規模約  
2.0×2.5m、面積約5.0m<sup>2</sup>、3  
ヶ所(総面積約15.0m<sup>2</sup>)につ  
いて、現地表(T.P.+7.8～7.9  
m前後)下2.0m前後までを  
調査した。調査で使用した標  
高は、八尾市街区多角補助点  
3B405(調査地北東T字交差  
点:T.P.+7.787m)である。

【地層】現地表0.3～0.9m  
前後までは、客土・盛土層(0  
層)。以下現地表下2.0m前後  
までの1.1～1.7m間におい  
て4層の基本層序を確認した。



第91図 平・断面図(S = 1/100)

1層は島畑の作土層(T.P.+7.5~7.6m)である。3~4層に細分可能である。土師器や須恵器、瓦器の細片が混在する。2層は、1・2区確認の整地層(T.P.+7.1~7.2m)と考えられる。層厚は0.1~0.2mを測る。3層は黒色の土壤化層(T.P.+6.9~7.0m)である。4層は、ラミナ構造の発達した河川堆積層(T.P.+6.7~6.9m以下)である。

【検出遺構・出土遺物】1区の2層上面において柱穴を1個(柱穴1)検出した。柱穴1は、掘形平面形状が梢円形~隅丸方形(長軸:0.6m 短軸:0.45m)を呈するもので、中央や北西よりにおいて径0.2mの柱痕跡を確認した。掘形埋土には土師器細片が少量混在していた。帰属年代は古代と考えられる。

(3)まとめ:今回の調査では、調査地の北部~中央部に設定した1・2区において、2層整地層を確認したほか、この上面より柱穴を1個検出した。柱穴は、形状や規模から古代に帰属する可能性を考えられ、本調査地の標高約30mで実施したTG T99-1調査で検出された奈良~平安時代の集落に関連するものとして特筆される。

#### 【参考文献】

- ・高萩千秋1998「XIV 東郷遺跡(第52次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会

## 24) 東郷遺跡(2010-177)の調査

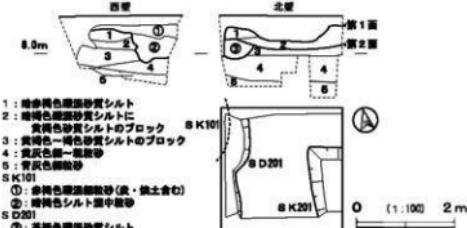
(1)調査地:東本町一丁目79(第39図参照)

(2)調査概要:平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25m<sup>2</sup>1ヶ所について、現地表(T.P.+8.8m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点3C366(調査地西20m地点:T.P.+8.646m)である。

【地層】盛土は0.2m前後で、0.4~0.8mに及ぶ擾乱が見られる。1層は赤褐色濁混砂質シルト。上面の標高は8.5~8.5m程度で、本層上面で近世の遺構を捉えた(第1面)。2・3層は整地層の可能性がある。3層上面で中世の遺構を捉えた(第2面)。4・5層はいずれも河川堆積層である。

【検出遺構・出土遺物】1層上面では、西壁北端で土坑SK101を検出した。幅(径)0.9m・深さ0.7m程度を確認した。底に瓦、釘などが埋まっていた。調査中、4層から多量の湧水があった。おそらく井戸であろう。3層上面では、調査区南東部で土坑SK201、西端で溝SD201を検出した。SK201は方形で、東西0.75m×南北1.5m程度を検出した。深さは0.3m程度である。埋土は茶褐色砂質シルトに黄褐色粘土質シルトのブロックが混入する。土師器・瓦器などが少量出土している。SD201は幅0.5m程度を検出した。深さは0.5mを測る。埋土は茶褐色濁混砂質シルト、土師器・瓦質羽釜などが出土した。

(3)まとめ:今回の調査では、現地表下0.2~0.7m程度の浅い部分で中世の遺構を確認することができた。最下で確認した4・5層は、古長瀬川から派生する埋没河川で、南北に流下しており、この埋没河川が、調査地周辺の中世以降の基盤層となっており、現在の集落と重複していることが判った。



第92図 平・断面図(S=1/100)

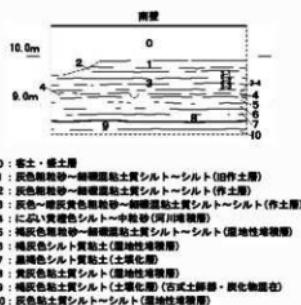
## 25) 中田遺跡(2010-142)の調査

(1) 調査地：八尾木北二丁目55番2（第41図参照）

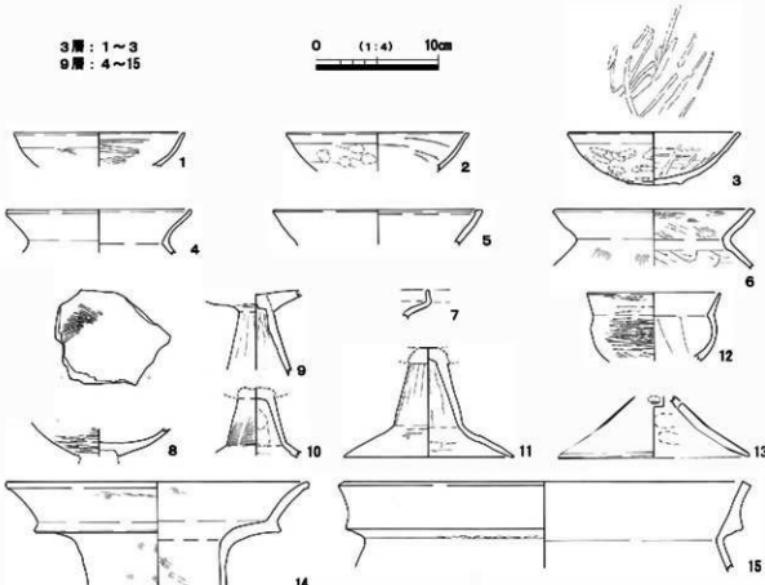
(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 4.0$ m、面積約8.0m<sup>2</sup>1ヶ所について、現地表(T.P.+11.6m前後)下2.2m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点 10E 04(調査地南西交差点南西角:T.P.+10.214m)である。

【地層】現地表下0.7m前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下2.2m前後までの1.5m間において10層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+9.8~9.9m)である。2層は近世頃の作土層の可能性が高い。3層は中世頃の作土層と推測される。土師器や瓦器が混在し、4層に細分できた。4層は厚層約10cmの河川堆積層である。5・6層は湿地性堆積層である。7層は黒褐色を帯びた土壤化層(T.P.+8.8~8.9m)で、作土層の可能性が高い。8層は湿地性堆積層である。9層は古墳時代初頭頃の土壤化層(T.P.+8.5~8.7m)である。古式土師器や炭化物を多く含む地層で、遺構内埋土の可能性も考えられる。10層は湿地性堆積層である。

【検出遺構・出土遺物】検出遺構なし。出土遺物は、3層から中世頃の土師器や瓦器が出土したほ



第93図 断面図(S=1/100)



第94図 出土遺物実測図

か、9層からは古墳時代初頭～前期に帰属する古式土師器が出土した。

3層出土遺物 1～3は瓦器碗。いずれも口径が14～15cmを測るものである。外面は、措頭整形後ナデ調整を行い、粗雑なミガキが施される。内面は粗雑なミガキが見えるほか、3の見込み部分には平行暗文が加えられる。3には退化の著しい高台が付く。概ね14世紀代の所産である。

9層出土遺物 4～15は弥生～古式土師器である。4～7は壺。4は庄内式、5は布留式、6は布留系に分類される個体である。7は口縁端部が受け口を成す個体で、搬入品の可能性が高い。8～13は高杯。8は内、外面ともに密にミガキが施された個体で、内面には漆のような付着物を認める。9～11は柱状部と据部に変化点が存在する個体である。13は弥生後期に帰属する個体で、胎土に角閃石が混在する。14・15は大型の壺と推測される。14は二重口縁壺。口径は24.7cmを測る。15は山陰地域からの搬入品と考えられる。口径は32.8cm。鉢の可能性も考えられる。

(3)まとめ：今回の調査では、古墳時代初頭～前期に比定される9層土壤化層の検出が特筆される。9層上・下面において遺構の有無を確認したところ、遺構は認められなかつた。したがつて、調査では9層を古式土師器包含層と見なしたが、遺物の出土状況や出土量から推測すると、遺構内埋土に相当する可能性が高い。周辺で調査が行われる際には注意されたい。

#### 【参考文献】

- ・道 真1993「1. 中田遺跡(91-353)の調査」『八尾市内遺跡平成4年度発掘調査報告書II』八尾市文化財調査報告28 平成4年度公共事業』八尾市教育委員会

## 26) 中田遺跡(2010-198)の調査

### (1)調査地：刑部一丁目8番2(第40図参照)

(2)調査概要：平面規模約2.0×2.0m、面積約4.0m<sup>2</sup>1ヶ所について、現地表(T.P.+10.75m前後)下2.0m前後までを調査対象とした。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点10D70(調査地北西部:T.P.+10.439m)である。

【地層】現地表下0.5m前後までは、整地に伴う客土(0層)である。以下、地表下1.25mまでに基本層序を7層確認した。1層は作土層。2・3層は砂質シルトで酸化鉄斑が認められる。4・5層も砂質シルトである。6層(T.P.+9.2～9.4m)はMn斑が認められる褐色の砂質シルト。奈良時代後期以降と推定される土師器や須恵器の細片を含む。7層は層厚が0.4m以上の灰色シルトである。

【検出遺構・出土遺物】6層で土師器・須恵器を包含する地層を確認した。土器類はすべて細片化しており、時期を明確にし得たものは少ないが、おそらく奈良時代後期のものと推定される。

(3)まとめ：6層が奈良時代後期の遺物包含地層であることを確認した。調査地の北約50mの地点では、昭和63年に中田遺跡第1次調査が行われ、T.P.+8.2～8.4m前後で、弥生時代後期後半の遺構が検出された。これらの調査成果から、この付近では弥生時代後期～奈良時代の間に約1.0mにおよぶ堆積層が形成されたことが想定され、当地の下層でも弥生時代後期の包含層が存在する可能性がある。

#### 【参考文献】

- ・成海佳子1988「24中田遺跡(第1次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報 昭和62年度(財)八尾市文化財調査研究会報告16』(財)八尾市文化財調査研究会



第95図 断面図(S=1/100)

## 27) 中田遺跡(2010-257)の調査

(1) 調査地：刑部四丁目110番1・112番の各一部（第40図参照）

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 2.0$ m、面積約 $4.0 \text{ m}^2$ 2ヶ所について、現地表(T.P.+10.9m前後)下2.0m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点 3D104（調査地北西：T.P.+10.594m）である。

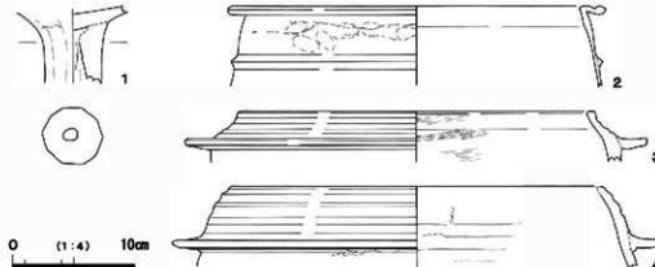
【地層】現地表下0.7m前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.3m間において11層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+10.1m)である。2～4層は近世頃の作土層である。5層は1区確認の中世遺物包含層(T.P.+9.6m)である。6・7層は2区で確認した中世遺物包含層(T.P.+9.8m)である。8～10層は湿地性堆積層である。11層は河川堆積層である。

【検出構造・出土遺物】検出構造はなし。出土遺物は、5～7層中世遺物包含層から、土師器や須恵器、瓦器、瓦質土器が出土した。この内図化できたのは5層から出土した4点である。1は土師器高杯の柱状部細片である。柱状部に面取り(10面)が行われる個体で、概ね奈良時代の所産である。2は大和産の土師器羽釜である。口縁部が「く」の字状に大きく屈曲する個体で、断面三角形を呈した退化の著しい小さな鉢を張り付けている。口径は30.0cm。3・4は河内産の瓦質土器羽釜である。いずれも口縁部は内湾し、端部には平坦面を形成する。調整は、外側が横ナデ、内側がハケナデや板ナデである。口径は3が28.2cm、4が30.1cmを測る。2～4は14世紀代の所産と推測される。

(3)まとめ：今回の調査では、T.P.+9.6～9.8mにおいて、14～15世紀に形成されたと推測される5～7層中世遺物包含層を確認することができた。この内1区に存在する5層は、ブロック土で構成されていることから、遺構埋土の可能性が高い。周辺ではNT94-28次調査が実施されており、当地一帯に中世集落が展開している可能性を指摘しているが、今回の成果はこれを裏付ける成果として特筆される。

### 【参考文献】

- ・西村公助1995「V 中田遺跡(第28次調査)」『中田遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告49』(財)八尾市文化財調査研究会



第96図 断面図(S=1/100)

## 28) 中田遺跡(2010-315)の調査

(1)調査地：八尾木北三丁目225番2（第41図参照）

(2)調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ 、面積約 $6.25\text{ m}^2$  1ヶ所について、現地表(T.P.+10.6m前後)下2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3E042（調査地北東20m地点:T.P.+10.371m）である。

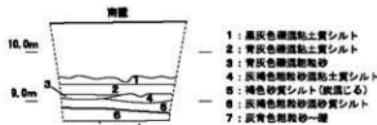
【地層】0層盛土層は約1.0mあり、以下には1層旧作土層、2層床土層がある。3・4層は粗粒砂～礫が混じり、5層には炭・土器の小破片が含まれる。6層が遺構ベースで、7層は河川堆積層である。

【検出遺構・出土遺物】5層からは、弥生時代後期～古墳時代前期の土器片が、炭とともに出土していることから、5層は当該時期の遺物包含層、6層が遺構ベースを構成するものと考えられる。

(3)まとめ：今回の調査では、現地表下2.0m前後で弥生時代の遺構面および遺物包含層を検出した。周辺でも当該時期の遺構・遺物を検出していることから、当遺跡では、当該時期の集落が広範囲にわたって存在しているものと考えられる。

### 【参考文献】

- ・成海佳子1996「II 中田遺跡(第6次調査)」『中田遺跡 (財)八尾市文化財調査研究会報告49』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則1992「VI 中田遺跡第7次調査(NT91-07)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告34』(財)八尾市文化財調査研究会



第98図 断面図

## 29) 東弓削遺跡(2009-481)の調査

(1) 調査地: 都塚1丁目37番 (第42図参照)

(2) 調査概要: 平面規模約  $2.0 \times 2.0$ m、面積約  $4.0 \text{ m}^2$  2ヶ所について、現地表(T.P.+14.4m)下2.5mまでを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区補助点3E093(調査地北25m: T.P.+14.180m)である。

【地層】 0層盛土は、0-1真砂土と0-2アスファルト・コンクリート塊等を含む盛土に分かれる。1層暗褐色中粒砂は旧表土と考えられ、層厚0.25m前後、上面の標高は13.3m程度を測る。2層黄褐色極細粒砂へ中粒砂は層厚0.7~1.0m、下ほど粒径は小さくなる。3層灰黃褐色砂質シルトは厚0.5m前後まで確認した。

【検出遺構・出土遺物】なし。

(3)まとめ: 調査地の北には「大塚」の石碑のある高まりが接しており、古墳等に関わる遺構の存在が期待されたが、玉串川の河川埋土と考えられる地層を確認したにとどまった。調査地から西へは2m程度低くなっていることから、当地は玉串川の自然堤防の西端であることがわかった。

### 【参考文献】

- 成海佳子2002「VI 東弓削遺跡第12次調査(HY2001-12)」『平成13年度(財)八尾市文化財調査研究会報告73』(財)八尾市文化財調査研究会

## 30) 東弓削遺跡(2009-453)の調査

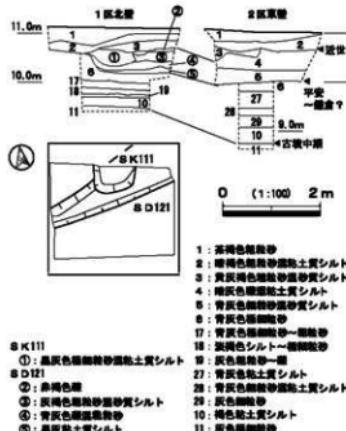
(1) 調査地: 八尾木2丁目182番(第41図参照)

(2) 調査概要: 平面規模約  $2.5 \times 2.5$ m、面積約  $6.25 \text{ m}^2$  2ヶ所(北から1・2区 総面積約  $12.5 \text{ m}^2$ )について、1区は現地表(T.P.+11m前後)下1.7m前後まで、2区は2.4m前後までを調査した。調査で使用した標高は八尾市街区多角点3E029(調査地南東20m地点:T.P.+11.471m)である。

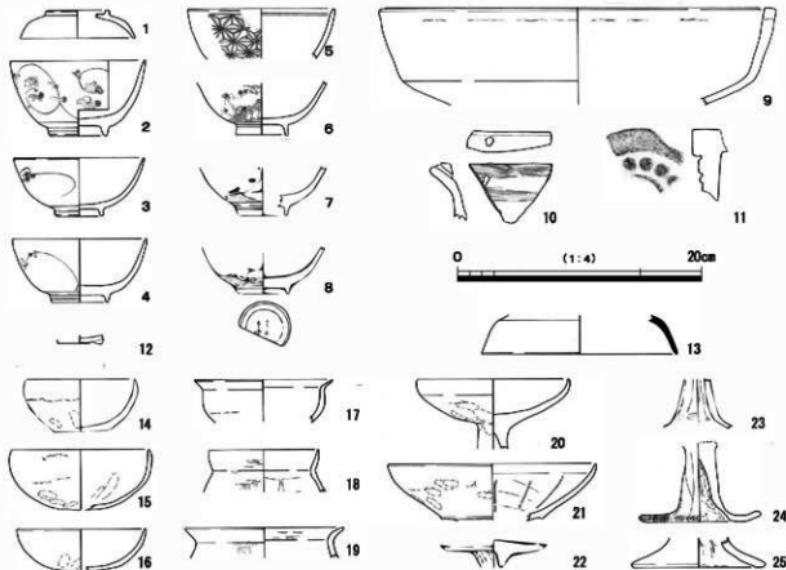
【地層】 1区・2区ともに地表面は削平され、道路面から0.4m前後低い。1層茶褐色粗粒砂は既存建物建築時の堆積物と考えられる。2層暗茶褐色粗粒砂混粘土質シルトは近世の遺物や炭を少量含む。3層黄灰色粗粒砂混砂質シルトはブロック層で、近世の遺物包含層・遺構埋土の可能性がある。4層暗灰褐色混粘土質シルトは近世の遺構面で、上面の標高は10.7m前後を測る。5層青灰色細粒砂混砂質シルトは包水量である。6層青灰色細粒砂は平安~鎌倉時代



第99図 断面図



第100図 平・断面図(S=1/100)



第101図 出土遺物実測図

頃の遺構面と考えられ、上面の標高は10~10.65mを測り、北側が高い。7~9層対応層は1区を17~19層、2区を27~29層とした。1区は17層青灰色極細~粗粒砂、18層淡褐色シルト~極細粒砂、19層灰色粗粒砂~礫で、いずれも互層である。2区は27層青灰色粘土質シルト、28層青灰色細粒砂混粘土質シルト、29層灰色細粒砂で、湿地性の堆積状況を示す。10層褐色粘土質シルトは古墳時代後期の遺物包含層で、1区から土器類が出土している。11層灰色極細粒砂は古墳時代後期の遺構面で、上面の標高は8.8~9.5mで、北西が高い。

【検出遺構】SK111: 4層上面で検出した。東西0.9m・南北0.6m以上・深さ0.35mの隅丸方形を呈する。埋土は①黒灰色極細粒砂混粘土質シルトで、江戸時代後期の土師器9・10、磁器2~8・漆器1・軒丸瓦11などが多量に出土した。SD121: 6層上面で検出した。幅0.5m以上・深さ0.5m、ほぼ東西流する。埋土は②赤褐色礫、③灰褐色粗粒砂混砂質シルト、④青灰色礫混粗粒砂、⑤黒灰色粘土質シルトで、③・④層から鎌倉時代の瓦器(12)・瓦のほか、弥生時代後期~後期の土器片が少量出土した。

【出土遺物】1は赤漆が塗布される漆器椀蓋である。2~8は肥前系の磁器碗である。2は外面に花唐草文を配する。3・4は外面に折松葉文を配し、見込みには蛇の目釉剥ぎが行われる。5は外面を手描きの麻の葉文で埋める。6~8は外面に草木文等を配し、8の高台裏には圓線内に「大明年製」の銘がある。9は大型の器種で10とともに壙・炮烙などと考えられる。11は巴文軒丸瓦である。いずれも18世紀後半(江戸時代後期)のものと考えられる。12は見込みに粗い平行ヘラミガキが施される。13世紀(鎌倉時代中期)のものであろう。13~25は1区北部の1区10層中からまとめて出土した。いずれも遺存状態は良い。13は6世紀後半(古墳時代後期後半)の須恵器杯蓋で、小型杯には、深めで小さな平底を持つ14・15、浅い半球形の16、外反する口縁部の17がある。小型壷18の口縁部は内湾し、壺19の口縁

表3 出土遺物一覧

番号	出土地	器種	法量(cm)	備考
1	S K111	漆器	壺 口径 9.4	・表面に赤漆を塗布
2	S K111	磁器	碗 口径 11.0	・高台基に1条・高台基に2条の團線・花唐草文は3方・見込みに蛇の目軸測ぎ
3	S K111	磁器	碗 口径 10.6	・高台基・高台基に團線・折松葉文は3方・見込みに蛇の目軸測ぎ
4	S K111	磁器	碗 口径 10.9	・高台基に1条・高台基に2条の團線・折松葉文は3方・見込みに蛇の目軸測ぎ
5	S K111	磁器	碗 口径 11.8	・口縁内面に2条の團線
6	S K111	磁器	碗 高台径 4.3	・高台基に2条の團線
7	S K111	磁器	碗 高台径 4.0	・高台基に2条の團線・高台裏面に蛇?
8	S K111	磁器	碗 高台径 4.2	・高台基に2条の團線・高台裏面の團線内に「大明年製」の鉢
9	S K111	土師器	炮烙 口径 32.4	・火を受ける
10	S K111	土師器	堀 ? 孔径 0.7	・火を受ける・口縁上端に施成前穿丸
11	S K111	軒丸瓦	瓦当 —	・瓦当径は15cm前後・表文径1.3cmで大きくな・19個で一周
12	S D121	瓦	高台径 3.6	・見込みに粗い平行ヘラミガキ
13	1区10層	須恵器	杯盤 口径 15.8	
14	1区10層	土師器	杯 口 径 8.9	・小さい平底状を呈する・内面は黒色
15	1区10層	土師器	杯 口 径 11.2	・小さい外反する口縁部を有する・内面は黒色
16	1区10層	土師器	杯 口 径 10.3	・半球形の器形を呈する
17	1区10層	土師器	杯 口 径 11.2	・小さい平底状を呈する・内面は黒色
18	1区10層	土師器	壺 口 径 8.9	・内傾する口縁部
19	1区10層	土師器	壺 口 径 12.8	・外反する口縁部
20	1区10層	土師器	高杯 口 径 12.4	・浅い半球形の杯部
21	1区10層	土師器	高杯 口 径 17.0	・有脚高杯・杯底部との接合部からの欠損・体部に粗いヘラミガキ
22	1区10層	土師器	高杯 基部径 3.0	・杯体部との接合部からの欠損・見込みに放射状ヘラミガキ
23	1区10層	土師器	高杯 —	
24	1区10層	土師器	高杯 横径 10.0	・横端部にヘラによる腰帯文状のキザミ目
25	1区10層	須恵器	高杯 横径 1.7	

部は外反する。高杯には大小2種があり、浅い半球形の20は小型、杯底部と体部の境に稜を持つ21は大型で、体部には暗文状のヘラミガキが数条ある。杯底部22の内面には放射状暗文状のヘラミガキが認められる。脚部の23~25はいずれも粗雑なつくりのもので、24の握端部にはヘラによる刻み目が施される。いずれも、須恵器杯壺13と同時期の6世紀後半(古墳時代後期)のものと考えられる。

(3)まとめ：今回の調査では、北側の1区で江戸時代・鎌倉時代・古墳時代後期の遺構・遺物を検出した。調査地の旧地形は南東下がりで、古墳時代後期の比高差は0.7m程度に及ぶ。この高まりでまとまって出土した土器類13~25は未使用の可能性があり、埋葬・祭祀等の何らかの施設があった可能性がある。鎌倉時代は埋没河川上に集落が構築されており、広範囲に同時期の集落域が確認されている。それ以前については、地層の堆積状況から、調査地北西側は河川の本流に近く、南東側は沼沢地状であつたことが判った。江戸時代以降は、今まで続く居住域に一致している。

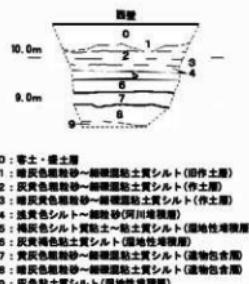
### 31) 東弓削遺跡(2010-291)の調査

(1) 調査地: 八尾木東一丁目109番1 (第41図参照)

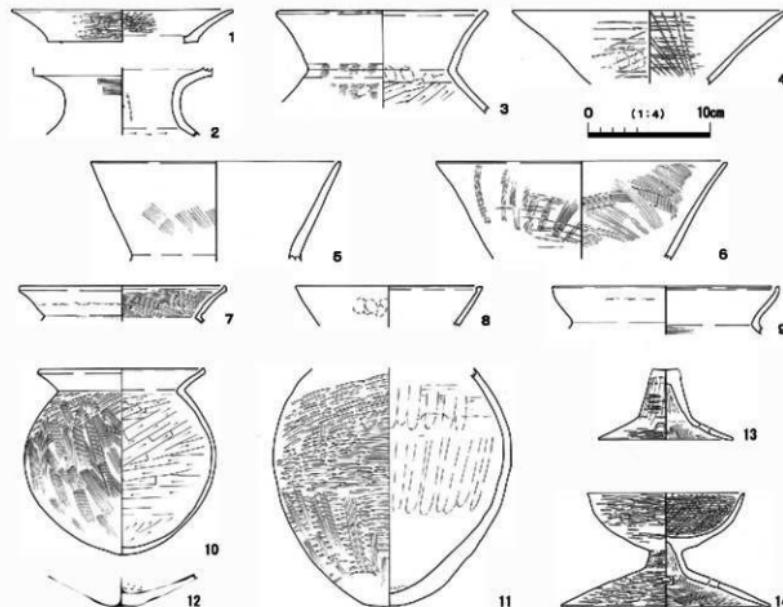
(2) 調査概要: 平面規模約  $2.0 \times 3.0\text{m}$ , 面積約  $6.0\text{ m}^2$  1ヶ所について、現地表(T.P.+10.7m前後)下2.2m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点10E20(調査地北西交差点: T.P.+10.916m)である。

【地層】現地表下0.4m前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下2.2m前後までの1.8m間ににおいて9層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+10.3m)である。2・3層は作土層である。4層は河川堆積層(T.P.+9.8m)である。5・6層は湿地性堆積層である。7層は古墳時代初頭～前期の遺物包含層(T.P.+9.3m)である。8層も古墳時代初頭～前期の遺物包含層(T.P.+9.0m)である。遺構の埋土の可能性が考えられる。9層は湿地性堆積層(T.P.+8.7m以下)である。

【検出遺構・出土遺物】検出遺構はなし。出土遺物は、7・8層から古式土師器が出土、14点を図化した。1～6は壺。1は二重口縁壺で、内外面に横位ミガキを密に施した後、内面には放射状のミガキを加える。口径は18.2cm。2は複合口縁壺で、頸部外面にハケナデが見えるほか、肩部内面にはケズリ



第102図 断面図(S = 1/100)



第103図 出土遺物実測図

が行われる。3～6は広口の直口壺である。外面調整は、ハケナデ後ナデ(3・5)と横位ミガキ(4・6)に区分される。4の内面には横位ミガキ後放射状にミガキが施される。口径は、3が16.9cm、4が22.4cm、5が20.3cm、6が23.8cmである。7～10は甕。7・10は庄内式甕で、口縁端部をつまみ上げるほか、頸部内面はケズリにより屈曲が鋭利である。7の口径は16.8cm、ほぼ完形の10は、口径13.6cm、器高15.2cmを測る。8は口縁端部が内厚した布留式甕(口径15.2cm)と推測される。9は口縁端部が内厚気味で頸部内面の屈曲が鋭利な甕(口径15.5cm)で、肩部内面にはハケナデが行われる。11はやや長胴気味の体部を有する個体で、外面には粗いタタキが施される。底部外面には、小さな平坦面が形成される。色調は灰黄色を呈する。搬入品の可能性が高い。12は壺の底部。13・14は高杯。全体の把握できた14は、口径12.8cm、器高9.3cmを測る楕円高杯で、内外面ともに密にミガキを施すほか、口縁部内面には放射状にミガキを加えている。これらの土器は、古墳時代初頭～前期(庄内式期新相～布留式期古相)の所産と推測される。

(3)まとめ：今回確認した7・8層古墳時代初頭～前期遺物包含層は、遺物の出土状況から勘案すると、本調査区を包括するような遺構の埋土であったことが推測される。本調査地の西約30mに位置するHY88-4次調査地では、当該期(庄内式期古層)の古式土器類を含む溝が検出された。出土遺物は、在地産のほか、播磨や加賀南部、摂津、阿波、泉州、吉備、近江などの地域から持ち込まれたものが含まれており、地域間交流を行っていた集団の居住域が展開していたと考えられる。今回の成果により、この居住域がさらに東に広がる可能性が高くなった。

#### 【参考文献】

- 原田昌則1993「I 東弓削遺跡第4次調査(HY88-4)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告37』(財)八尾市文化財調査研究会

### 32) 東弓削遺跡(2010-359)の調査

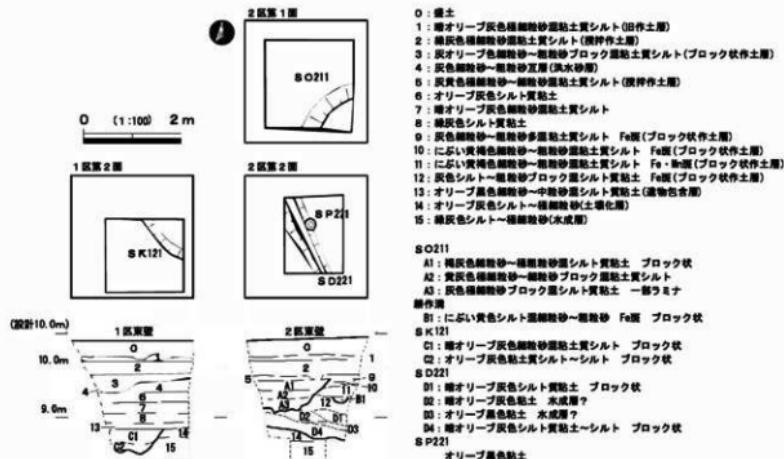
#### (1)調査地：八尾木四丁目10番の一部(第41図参照)

(2)調査概要：平面規模約2.5×2.5m、面積約6.25m<sup>2</sup>2ヶ所(北から1・2区 総面積約12.5m<sup>2</sup>)について、現地表(T.P.+10.6m)下2.5m前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区三角点1070A(調査地北東部:T.P.+10.883m)である。なお1・2区共に調査予定地点から北へ移動している。

【地層】0層は客土・盛土層。以下現地表下2.5m前後までの2.2m間において15層の基本層序を確認した。1層は旧作土層(T.P.+10.2m前後)。2層(T.P.+9.9～10.1m)は攪拌された作土層、3層(T.P.+9.5～9.9m)はブロック状の作土層である。4層(T.P.+9.5～9.8m)は1区でのみ見られた洪水砂層、2区5層は3層に類似する作土層。1区6～8層(T.P.+8.9～9.5m)は湿地性堆積層と考えられるが作土層の可能性もある。2区9～12層(T.P.+9.1～9.8m)はブロック状の作土層で、12層上面では耕作溝(B1層)が見られる。6～12層の時期は中世頃であろう。1区13層(T.P.+8.8m前後)は古墳時代初頭の遺物包含層。14層(T.P.+8.5～8.8m)は15層の土壤化部分。15層は水成層である。

【検出遺構】第1面～2区9層上面(T.P.+9.8m)～落ち込み1基(SO211)。北東～南西方向の肩から北西方向への落ち込みで、深さ約70cmを測る。埋土はブロック状であるが、下層には一部ラミナが見られる。層位的に時期は近世頃であろう。

第2面～14層上面(T.P.+8.8m)～1区で土坑1基(SK121)、2区で溝1条(SD221)、ビット1個(SP211)。SK121は北東部に位置し、弧状を成す掘方の一部を検出した。深さ約50cmで、埋土はブロック状の2層からなる。古墳時代初頭頃の土器片が少量出土。SD221は2区全域にわたる北西～南東方向の



第104図 平・断面図(S=1/100)

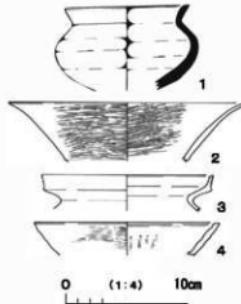
溝で、肩は調査区外となるが、遺構面はT.P.+9.2m前後と思われる。底面には流向に沿った隆起が認められる。深さ約65cm、幅2m以上で、埋土は4層からなる。古墳時代初頭～前期の土器が出土。S P221はS D221底面で検出した。直径約22cm・深さ約10cmを測る。

【出土遺物】1区4層-1は須恵器広口短頸壺で、古墳時代後期に比定される。1区13層-2は土師器高杯で、調整はヘラミガキ。3は吉備系の土師器壺である。共に古墳時代初頭(庄内式期)に比定される。2区S D221-4は布留式壺で、古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される。

(3)まとめ：1区で古墳時代初頭、2区で古墳時代初頭～前期の遺構を検出した。遺構面は南の2区が高くなっているが、調査地北側で実施した中田遺跡第3次調査では1区よりさらに低い約T.P.+8.6mであり、南に向かって高くなっている状況が確認された。

#### 【参考文献】

- 坪田真一 1992 「II中田遺跡(第3・4次調査)」『平成4年度 八尾市埋蔵文化財発掘調査報告(II)』(財)八尾市文化財調査研究会報告35』(財)八尾市文化財調査研究会



第105図 出土遺物実測図

### 33) 水越遺跡(2010-107)の調査

(1) 調査地：大塙943番5(第42回参照)

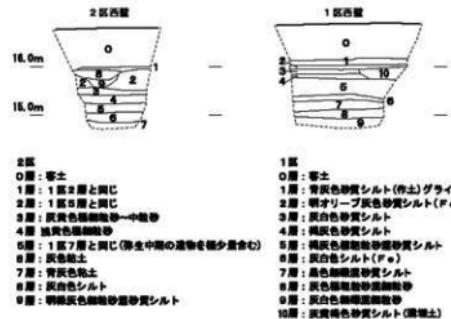
(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 3.0\text{m}$ (1区)、 $2.0\text{m} \times 1.5\text{m}$ (2区)、総面積約 $9.0\text{ m}^2$ の2ヶ所について、現地表(T.P.+16.9m前後)下1区で2.3m前後、2区で2.1m前後までを調査対象とした。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点3C106(調査地 交差点:T.P.+17.006m)である。

【地層】1区 現地表下0.7m前後までは、客土・盛土層(0層)である。以下表土下1.3mまでに9層の基本層序を確認した。1層はグライ化が認められる作土層。2~4層は水平堆積した砂質シルトを主体とする10cm程度の地層。3層上面を構築面とする溝を断面で確認。5層は極粗粒砂を含む砂質シルト。6層は酸化鉄斑が認められるシルト。7層は黒色で細礫を含む砂質シルトで、2区で検出した弥生時代中期後半の土器を含む5層に対応する。8・9層は極粗粒砂へ細礫を含む水成層である。

2区 現地表下0.7m前後までは、客土・盛土層(0層)である。以下表土下1.3mまでにおいて7層の基本層序を確認した。1層は1区の2層に対応。2層は1区の5層に対応するもので、上面を構築面とする溝を確認した。3・4層は極細粒砂へ中粒砂が優勢な水成層。5層は1区の7層に対応し、弥生時代中期後半の土器を極少量含む。6・7層は粘性が強い粘土層で、無遺物層である。

【検出遺構・出土遺物】1区で3層上面、2区で2層上面を切る溝を断面で検出した。いずれも近世～近代の水田に関連したものと推定される。遺物包含層は1区の5層および2区の7層である。2区7層から弥生時代中期後半の土器(焼)細片が出土しているが出土量は極少量である。

(3)まとめ：1区(7層)および2区(5層)で弥生時代中期後半の遺物を包含する地層の存在を確認した。ただし、2区では包含層である5層上面に極細粒砂を主体とする水成層(3・4層)の存在が認められるため、溝や谷地形に関連した環境下で形成された堆積層である可能性がある。なお、弥生時代中期後半の遺構は、調査地の北西約100mで行われた第1次調査で検出されおり、調査地点とも有機的な関係が想定される。



第106図 断面図(S=1/100)

#### 【参考文献】

- ・西村公助1983「第2章 水越遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概要 昭和56・57年度 (財)八尾市文化財調査研究会報告3』

## 34) 美園遺跡(2010-179)の調査

(1) 調査地：美園町四丁目109-3 (第43回参照)

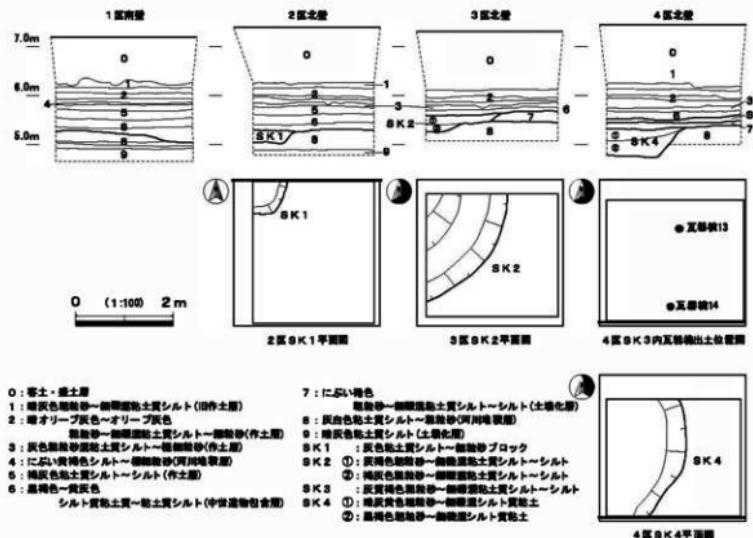
(2) 調査概要：平面規模約 3.0×3.0m、面積約 9.0 m<sup>2</sup> 4ヶ所(総面積約 36.0 m<sup>2</sup>)について、現地表(T.P.+7.2~7.4m前後)下 2.5m 前後までを調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角補助点3B262(調査地南:T.P.+6.969m)である。

【地層】現地表下 1.1m 前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下 2.5m 前後までの 1.4m 間において 9 層の基本層序を確認した。1 層は旧作土層(T.P.+6.3m)である。2 層はグライ化の顯著な近世～近代の作土層である。3 層は砂礫優勢の作土層である。4 層は 1 区確認の河川堆積層で、3 層作土層の母材に相当する。5 層は 1・2 区で確認した作土層である。6 層は中世の遺物包含層(T.P.+5.5~5.7m)である。7 層は 3・4 区に認められる土壤化層(T.P.+5.5~5.7m)である。8 層は概ね東南から北西に流れる河川堆積層(T.P.+5.3~5.5m)である。9 層は 1・2 区確認の土壤化層で、古代の作土層の可能性が考えられる。

【検出遺構・出土遺物】2～4 区において、土坑を 4 基(SK1～4)検出した。いずれも部分的に検出したもので、掘形形状や規模は不明な点が多い。検出面は、7 層上面(SK2・3)と 8 層上面(SK1・4)である。

SK1 は、横ね円形の掘形(径約 1.0m)であったと推測される。深さは約 30 cm。埋土はブロック土の单層で、瓦器細片が少量出土した。図化できた遺物はなし。

SK2 は、概ね径約 2.0m の円形掘形であったと思われる。深さは約 30 cm を測り、埋土は淘汰不良の 2 層から成る。土師器や瓦器の細片が少量出土した。図化できたのは 1 点(1)である。1 は瓦器碗。高

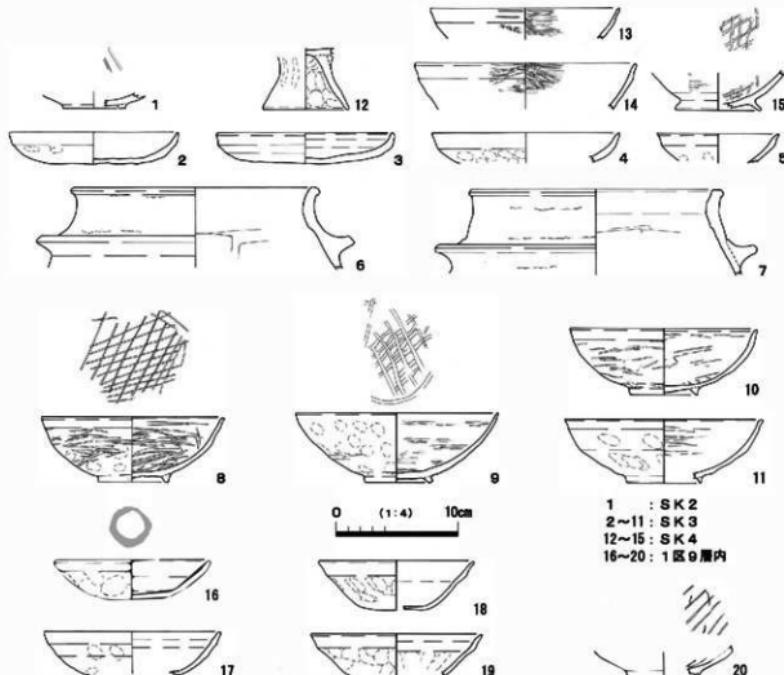


第107図 平・断面図(S=1/100)

台が逆台形を呈する個体で、見込みには平行状暗文が施される。12~13世紀代の所産と推測される。

SK3は4区で検出した。平・断面において掘形を確認していない。深さは10cm前後で、埋土はブロック土の単層である。遺物は土師器や瓦器が出土した。完形の瓦器碗などが出土したことから、4区を凌駕する遺構と認定した。図化できた遺物は10点(2~11)である。2~4は土師器皿。いずれも指頭成形後、口縁部付近を横ナデで仕上げている。口径は、2が13.7cm、3が14.2cm、4が15.4cmである。5は瓦器碗。内外面のミガキがほとんど認められない個体で、口径は9.5cmを測る。6・7は土師器羽釜。口縁部は外反し、端部を若干肥厚させる個体である。口径は6が19.0cm、7が20.4cmである。8~11は瓦器碗。高台部断面形状が台形の個体(8・9)と三角形の個体(10・11)に分類できる。調整は、内、外面ともにミガキを施すが、粗雑である。8・9の見込みには斜格子暗文が施される。口径は、8が14.9cm、9が16.1cm、10が15.3cm、11が16.5cmである。12世紀前半~中頃の所産である。

SK4は、SK2同様径約2.0mの円形掘形が想定される。深さは、最深部で約55cmを測る。埋土は粘性の強い泥状を呈した2層から成り、土師器や瓦器の細片が少量出土した。4点(12~15)を図化した。12は土師器の高台部である。高台部は「ハ」字状に開き、丸く終息する。調整は指ナデである。13~15は瓦器碗。3は口径15.4cm、4は口径18.0cmを測る。口縁部のナデが明瞭に行われるほか、内、外面ともに密にミガキが施される。5は「ハ」字状に開く高台部を有する個体で、見込みには斜格子状暗文



第108図 出土遺物実測図

を加える。いずれも11世後半の所産と推測される。

1区9層出土遺物 16~19は土師器碗。指頭成形後、口縁端部付近に横ナブを施す個体である。口径は、16が12.6cm、17が14.6cm、18が12.6cm、19が13.9cmである。この内16の底部内面には煤の痕跡を確認した。燈明皿として使用された可能性が高い。20は瓦器碗。見込みには平行状暗文を施す。

(3)まとめ：今回の調査では、中世頃の土坑を4基検出した。この内SK2・4は、径約2.0mの円形掘形に復元できることから、井戸であった可能性も考えられる。合わせて、SK3出土の完形瓦器碗の存在などを勘案すると、今回の調査地一帯が、当該期の居住域であった可能性が高い。本調査地の南約150mで行われたMS2009-7調査でも、中世の居住域に伴う遺構群を検出しており、その関連性が注目される。

### 35) 宮町遺跡(2010-87)の調査

(1) 調査地：宮町2  
丁目38-2 (第43図参照)

(2) 調査概要：平面規模約 $2.0 \times 3.0$ m、面積約 $6.0 \text{ m}^2$  1ヶ所について、現地表(T.P. +7.5m)下 $2.0\text{m}$ 前後までを調査した。調査で使った標高は、八尾市街区多角点10B49(調査北東部:T.P. +7.835m)である。

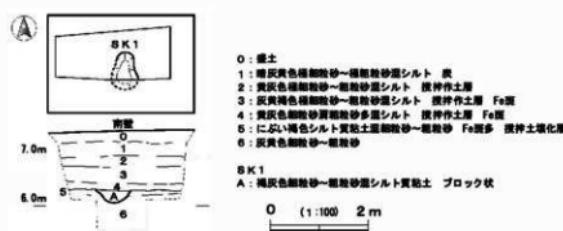
【地層】0層は盛土層。以下現地表下 $2.0\text{m}$ 前後までの $1.8\text{m}$ において6層の基本層序を確認した。1層(T.P. +7.0~+7.3m)は近代の整地層であろう。2~4層(T.P. +6.3~+7.0m)は搅拌され締りの悪い作土層で、時期は近世である。3・4層からは18世紀頃の土器・陶磁器・瓦片が多く出土した。5層(T.P. +6.2~+6.3m)は搅拌され、6層の土壤化部分と捉えられる。上面が遺構面である。12世紀代に比定される瓦器碗・土器が出土した。6層(T.P. +6.2m以下)の砂層は河川堆積層である。

【検出遺構】5層上面(T.P. +6.3m)で土坑1基(SK1)を検出した。規模は東西約55cm・南北約75cm・深さ約25cmを測る。埋土はブロック状の單一層で、13世紀前半の瓦器碗小片が出土した。

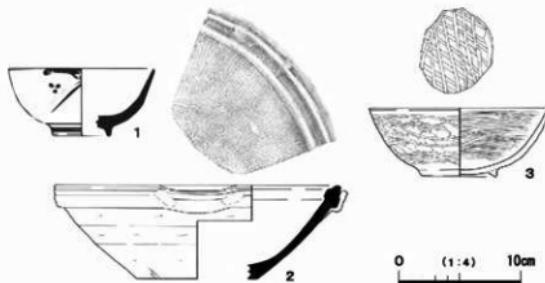
【出土遺物】3・4層-1は肥前系磁器碗で、外面の文様は梅樹文と思われる。2は復元口径23.6cmを測る小形の陶器摺鉢で、摺目は9本/2.2cmである。3は摺鉢である。

5層-3は瓦器碗で、ほぼ完形に復元できた。ヘラミガキは内外面共に密で、見込みの暗文は斜格子状である。12世紀前半に比定される。

(3) まとめ：調査では平安時代末の遺構・遺物を検出した。同時期の遺構は南西部の佐堂遺跡域でも確認されており、同一の集落域と考えられる。近世の作土中には多くの18世紀頃の遺物が含まれており、居住域に近いものと考えられる。



第109図 平・断面図(S=1/100)



第110図 出土遺物実測図

#### 【参考文献】

- 原田昌則2000「IV 佐堂遺跡第1次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告66』(財)八尾市文化財調査研究会

### 36) 八尾寺内町(2010-145)の調査

(1) 調査地：本町5  
丁目29番の一部及び30  
番の一部(第43図参照)

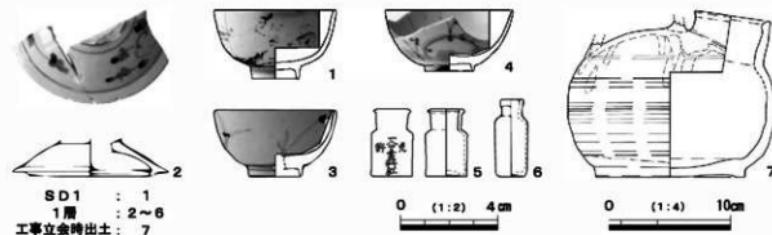
(2) 調査概要：平面  
規模約2.5×2.5m、面  
積約6.25 m<sup>2</sup> 2ヶ所(總  
面積約12.5 m<sup>2</sup>)につい  
て、現地表(T.P.+8.0  
~8.2m前後)下2.0m  
前後までを調査した。  
調査で使用した標高は、  
八尾市街区多角補助点  
3C300(調査地南西部  
付近:T.P.+8.180m)である。

【地層】現地表0.1~0.2m前後までは、客土・盛土層(0層)。以下現地表下2.0m前後までの1.8  
~1.9m間ににおいて5層の基本層序を確認した。1層は近世の八尾寺内町形成に伴う整地層(T.P.+7.6  
~7.9m)である。2層は瓦器細片の混在する作土層である。3~5層は水成層で、この内3~5層が河  
川堆積層、4層が湿地性堆積層に相当する。3層は、中世の構造構築基盤層に比定される。

【検出遺構】1区2層上面において、溝を1条(SD1)検出した。SD1はほぼ南北に直線的に伸びるもので、東肩を確認することができた。長さは2.5m以上、幅は1.2m以上、深さは0.8mである。埋  
土からは、近世陶磁器や巴文軒丸瓦などが出土した。図化できたのは1点(1)である。1は染付椀。口  
径は10.0cm、器高は5.6cmを測る。所謂くらわんか茶碗に分類されるもので、18世紀後半に帰属する。

【出土遺物】1層出土遺物 2は染付蓋。口径は10.0cmである。3~4は染付椀。いずれも口径は  
10.0cm、高さは5.0~5.5cmを測る。18世紀後半の所産である。5~6はガラス製の小瓶。5は、口径  
2.3cm、高さ5.5cmの無色透明な個体で、部体には『免許 一〇ヤ食料紅』と印刻されている。6は、  
口径1.9cm、高さ6.3cmの茶色を帯びた個体である。

工事立会時出土遺物 7は、瀬戸・美濃系陶器のし瓶である。胴部が球状を呈し、肩部に筒状の短い  
注口を付した個体で、胴部天井には把手の痕跡が見える。調整は主に回転ナブが施されるほか、底面は  
回転ヘラケズリを行い、低い高台を削り出している。江浦洋氏の分類によれば、本例はC-1類に含ま  
れる。帰属年代は18世紀代と推測される。



第111図 平・断面図(S=1/100)

(3)まとめ：今回の調査地は、八尾寺内町の北端に位置する北口門の東方付近にある。したがって、寺内町の北を画する堀や土居に注視しながら調査を進めたが、そのような遺構は確認できなかった。ただし、寺内町の形成に伴うことが推測される1層を確認したことから、本調査地が堀や土居の南側、寺内町の内に位置したこと可能性が高くなった。当該期のものと推測されるSD1は、南北に直線的に伸びるなどの規格性を有しており、寺内町の町割りを考える上で貴重な成果と思われる。中世については、基盤層と推測される3層水成層上面を調査したが、遺構の検出は皆無であった。これ以後、八尾寺内町が形成されるまでは、作土層である2層を確認していることから、当地が生産域として利用されていたことが明らかになった。

【参考文献】

- ・江浦 洋 2010.3 「近世淀瓶小考補遺」『大阪文化財研究第36号』(財)大阪府文化財センター

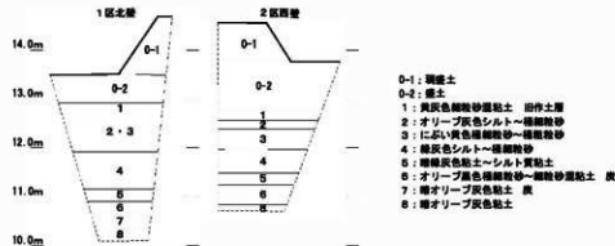
### 37) 弓削遺跡(2009-433)の調査

(1) 調査地：弓削町南3-21-2（第46参照）

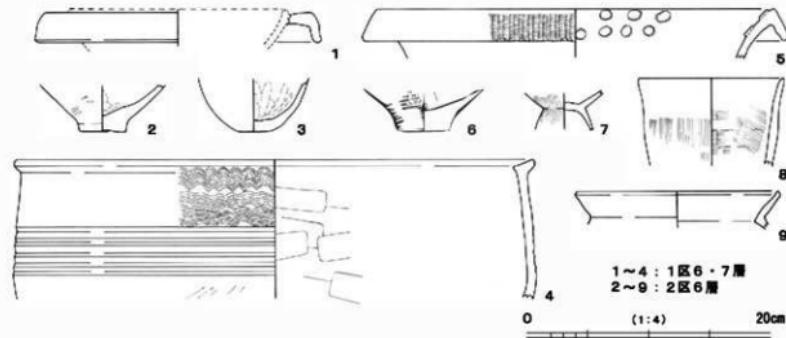
(2) 調査概要：平面規模約 $2.5 \times 2.5\text{m}$ 、2箇所（西から1・2区）、面積約 $12.5\text{m}^2$ について、現地表（T.P.+13.5～13.8m）下 $3.0\sim3.4\text{m}$ を調査した。調査で使用した標高は、八尾市街区多角点20A27（調査地北東部：T.P.+14.377m）である。

【地層】0層は客土・盛土。以下現地表下 $3.0\sim3.4\text{m}$ までの $2.0\sim2.8\text{m}$ において8層の基本層序を確認した。1層（T.P.+12.6～12.9m）は旧耕土、2～5層（T.P.+10.9～12.7m）は水成層で、粘土～極細粒砂からなる流水堆積である。湧水が著しかった。6層（T.P.+10.6～11.2m）は暗色を呈する遺物包含層である。層厚 $30\sim40\text{cm}$ を測り、東の2区が約 $30\text{cm}$ 高い。7層（T.P.+10.4～10.6m）は1区で見られた遺物包含層で、炭を含む汚れた層相で、遭構埋土の可能性もある。8層（T.P.+10.4～10.8m以下）が6・7層に対応する遺構面と捉えられる土壤化層である。

【検出遺構・出土遺物】湧水・壁面崩落が著しく、平面精査は実施しておらず、遺構は検出できなかった。6・7層からは弥生時代中期～後期、古墳時代初頭の土器の他、サヌカイト剥片が出土した。1区では掘削の際、6・7層を岐別していないため明確ではないが、出土遺物からみて6層が弥生時代後期



第113図 断面図 ( $S = 1/100$ )



第114図 出土遺物実測図

～古墳時代初頭、また1区で弥生時代中期の土器が比較的多く含まれていることから、7層が弥生時代中期の包含層である可能性がある。1区6・7層出土の1～4、2区6層出土の5～9を図化した。

1は水平口縁の高杯で、口縁部上面にヘラミガキを施す。2は壺底部、3は壺の底部か。4は大形の鉢で、外面に波状文・凹線文を巡らせる。5は広口壺で、口縁部外面に櫛描簾状文、内面には二段の円形浮文を巡らせる。6・7は壺底部で、7は東海系の台付き壺である。8は長頸壺。9は庄内式壺である。これらは1・4・5が弥生時代中期後半、2・6・8が弥生時代後期、3・7・9が古墳時代初頭に比定されよう。

(3)まとめ：調査では両調査区で弥生時代中期～後期、古墳時代初頭の遺物包含層を確認した。1区では6・7層の2層が見られたが、数枚の生活面が存在する可能性が高い。調査地は弓削遺跡西部に当たるが、西の田井中遺跡域との関連も考えられよう。

#### 【参考文献】

- ・森本めぐみ2001「XⅢ 弓削遺跡第2次調査」『(財)八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会



# 図 版



I-3-1)跡部遺跡(2009-356)の調査(周辺状況:西から)



I-3-1)跡部遺跡(2009-356)の調査(北壁:南から)



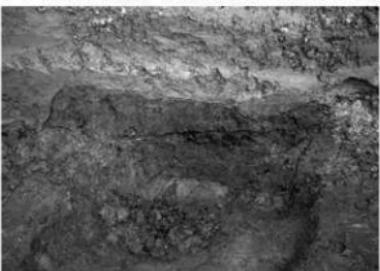
I-3-2)跡部遺跡(2009-431)の調査(周辺状況:北東から)



I-3-2)跡部遺跡(2009-431)の調査(1区6層上面全量:西から)



I-3-2)跡部遺跡(2009-431)の調査(1区6層上面全量:西から)



I-3-2)跡部遺跡(2009-431)の調査(2区土坑121:西から)



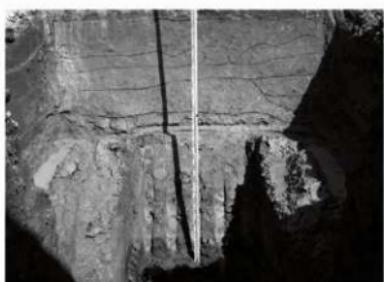
I-3-2)跡部遺跡(2009-431)の調査(2区6層上面:北西から)



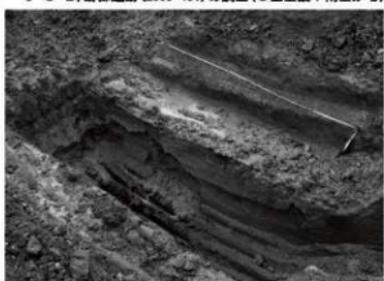
I-3-2)跡部遺跡(2009-431)の調査(2区6層上面全量:西から)



I-3-2) 脊部遺跡(2009-431)の調査(3区全景: 南西から)



I-3-2) 脊部遺跡(2009-431)の調査(3区下層状況: 南から)



I-3-2) 脊部遺跡(2009-431)の調査(4区西壁: 北東から)



I-3-2) 脊部遺跡(2009-431)の調査(5区東壁: 西から)



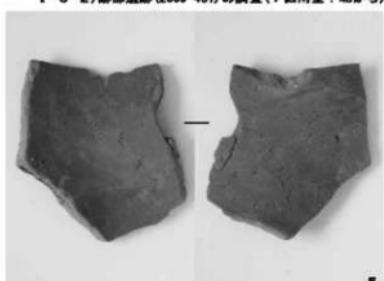
I-3-2) 脊部遺跡(2009-431)の調査(6区西壁: 南東から)



I-3-2) 脊部遺跡(2009-431)の調査(7区南壁: 北から)



I-3-2) 脊部遺跡(2009-431)の調査(出土遺物)



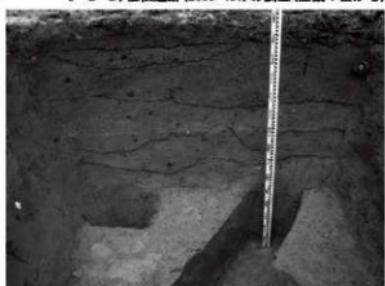
I-3-2) 脊部遺跡(2009-431)の調査(出土遺物)



I-3-3) 植松遺跡(2009-461)の調査(全量: 西から)



I-3-3) 植松遺跡(2009-461)の調査(S K 1: 北西から)



I-3-3) 植松遺跡(2009-461)の調査(北壁: 南から)



I-3-3) 植松遺跡(2009-461)の調査(調査状況: 南から)



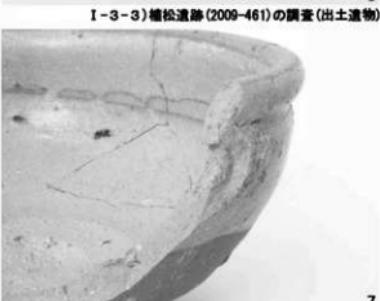
1~4  
I-3-3) 植松遺跡(2009-461)の調査(出土遺物)



5  
I-3-3) 植松遺跡(2009-461)の調査(出土遺物)



7  
I-3-3) 植松遺跡(2009-461)の調査(出土遺物)



7  
I-3-3) 植松遺跡(2009-461)の調査(出土遺物)



I-3-4) 登堀遺跡(2009-409)の調査(周辺状況: 北から)



I-3-4) 登堀遺跡(2009-409)の調査(西壁: 東から)



I-3-4) 登堀遺跡(2009-409)の調査(S K 1: 南壁から)



I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(周辺状況: 東から)



I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(1区a層上面: 北から)



I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(s D 1遺物出土状況: 北から)



I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(出土遺物)

1



I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(出土遺物)

3



4

I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(出土遺物)



5

I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(出土遺物)



7

I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(出土遺物)



6

I-3-5) 小阪合遺跡(2009-419)の調査(出土遺物)



I-3-6) 成法寺遺跡(2009-415)の調査(周辺状況: 北から)



I-3-6) 成法寺遺跡(2009-415)の調査(1区西壁: 東から)



I-3-6) 成法寺遺跡(2009-415)の調査(2区東壁: 西から)



I-3-6) 成法寺遺跡(2009-415)の調査(3区西壁: 東から)



I-3-6) 成法寺遺跡(2009-415)の調査(4区東壁: 西から)



I-3-6) 成法寺遺跡(2009-415)の調査(調査状況: 西から)



I-3-7) 中田遺跡(2009-449)の調査(全景: 南西から)



I-3-7) 中田遺跡(2009-449)の調査(遺物出土状況: 南東から)



I-3-7) 中田遺跡(2009-449)の調査(出土遺物)



I-3-8) 東弓削遺跡(2009-490)の調査(周辺状況: 南東から)



I-3-8) 東弓削遺跡(2009-490)の調査(北壁: 南東から)



I-3-8) 東弓削遺跡(2009-490)の調査(出土遺物)



I-3-9)八尾寺内町(2009-457)の調査(周辺状況:北から)



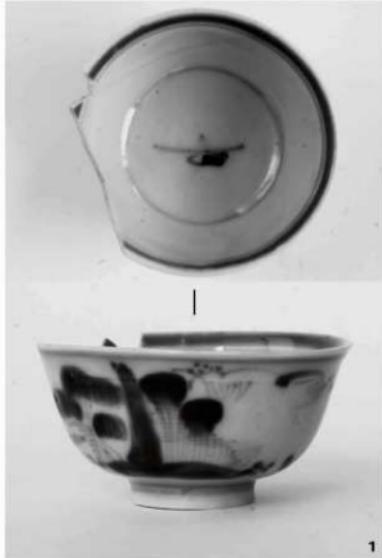
I-3-9)八尾寺内町(2009-457)の調査(1区第1面全量:西から)



I-3-9)八尾寺内町(2009-457)の調査(1区第2面全量:南西から)



I-3-9)八尾寺内町(2009-457)の調査(2区北壁:南から)



1

I-3-9)八尾寺内町(2009-457)の調査(出土遺物)